

Hokkaido University News

北大時報

平成27年

1

No. 730 January 2015

山口総長 年頭の挨拶

第17回北海道大学・ソウル大学 ジョイントシンポジウムを開催

お知らせ

・北方資料閲覧室に新たに木製展示棚を配置



年頭の挨拶

- 1 総長 山口 佳三

全学ニュース

- 3 大学入試センター試験の実施
4 第17回北海道大学・ソウル大学 ジョイントシンポジウムを開催
14 サステナビリティ・ウィーク2014の開催
18 北大フロンティア基金
20 「北海道地区FD・SD推進協議会」総会を開催
20 「平成26年度冬山登山講習会」を開催
21 「知的財産セミナー」を札幌キャンパス及び函館キャンパスで開催
22 COI-T「食と健康の達人」拠点フォーラム／第5回COI-Tプログラム「『食と健康の達人』拠点」参画機関会議を開催
23 鮮度保持技術シンポジウムを開催
24 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで第24回「赤い糸会&緑の会」を開催

部局ニュース

- 25 教育学研究院が西興部村と連携協定を締結
25 薬学研究院・薬学部が台湾 台北医学大学と部局間交流協定を締結
26 第2回リーディングプログラム国際シンポジウム“Ambition Across the Disciplines”を開催
27 第15回RIES-Hokudai国際シンポジウム「響」を開催
28 スラブ・ユーラシア研究センターが冬期国際シンポジウム「境界：ユーラシアで交差する動力」を開催
29 北方生物圏フィールド科学センターで水圏ステーション七飯淡水実験所竣工記念式典・祝賀会を挙行
30 北方生物圏フィールド科学センターで水圏ステーション七飯淡水実験所の一般公開を実施
31 鈴木 章名誉教授と小学生親子の実験交流イベント「サイエンスパーク in 北海道大学」を開催
32 平成26年度メディア・コミュニケーション研究院公開講座「企業とそのイメージを考える」が終了
33 国際広報メディア・観光学院がサハリン国立大学で留学説明会を実施
34 経済学部で北海道財務局長の特別講演会を開催
34 「おしよろ丸関係者向け内覧会」を横浜港で実施



第17回北海道大学・ソウル大学ジョイントシンポジウム



鮮度保持技術シンポジウム

- 35 農学研究院で平成26年度第3回FD研修会を開催
36 第12回脳科学研究教育センターシンポジウム「認知のダイナミクス～認知システムの動態を探る～」を開催
37 低温科学研究所技術部で第20回技術報告会を開催
38 北図書館で「英語多読」関連企画を開催
39 附属図書館で「救命導入講習会」を開催
40 総合博物館夏季企画展示の巡回展とおしよろ丸V世船内ツアーを小笠原村で開催
41 松本友関係資料を大学図書館で受贈

お知らせ

- 42 北方資料閲覧室に新たに木製展示棚を配置

博士学位記授与 43

レクリエーション

- 46 方円会が北大囲碁部との交流会を実施
- 全日本学生囲碁選手権大会に向けて「檄を飛ばす会」-

諸会議の開催状況 47

学内規程 48

研修

- 50 平成26年度北海道地区国立大学法人事務情報化講習会（Access研修 初級編・クエリ編・クエリ応用編）
50 平成26年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

表敬訪問

- 51 国内
52 海外

人事 53

- 55 新任副学長・部局長等紹介
55 新任教授紹介

訃報

- 56 名誉教授 松野 誠夫 氏



薬学研究院・薬学部 台湾 台北医学大学と部局間交流協定を締結



北方生物圏フィールド科学センター 水圏ステーション七飯淡水実験所の一般公開を実施



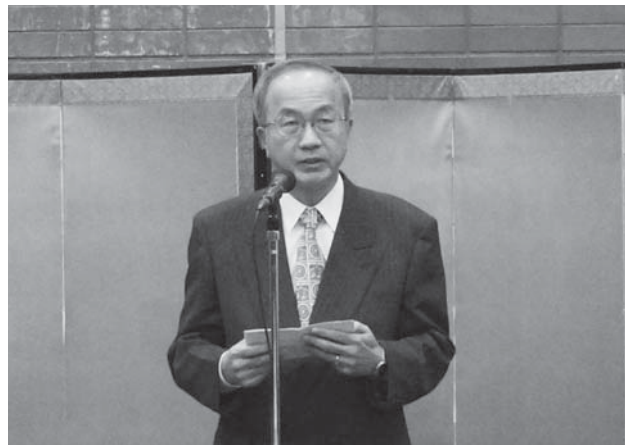
「サイエンスパーク in 北海道大学」



おしよろ丸関係者向け内覧会

年頭の挨拶

北海道大学総長 やまぐち 山口 けいぞう 佳三



新年あけましておめでとうございます。

平成27年の年頭にあたり、北海道大学の教職員、学生・大学院生の皆さんに、新年のご挨拶を申し上げます。

私達は、現在、来年4月より始まる第3期中期目標・中期計画期間に向けて、その準備に注力しています。この1年間を振り返りますと、安倍政権の下、第3期に向けて、国立大学法人を巡る情勢は、「国立大学改革プラン」を踏まえ、大学ガバナンス、運営費交付金のあるべき姿等について活発な議論があり、それが現在もなお続いています。こうした中、この1年は、本学にとりましても、第3期に向けての体制固めの年でありました。

実際、本学の昨年1年間を振り返りますと、3月には、私の総長就任1年を締めくくって、各部局からもご意見を頂いて、本学の中長期にわたる計画として、札幌農学校からの創基150周年となります2026年に向けた「北海道大学近未来戦略150」を策定しました。そうして、本学の4つの基本理念を踏まえ、「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」に向けて、大学改革を大胆かつ着実に進める12年間の改革戦略を示しました。

さらに、この戦略を後押しするものとして、昨年9月には、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援（SGU）」事業トップ型13校の1校として、本学の「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアチブ」構想が採択されました。このトップ型事業では、単なる大学の国際化に留まらず、大学力そのものの強化が求められています。また、10月には、文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に、ロシアとの大学間交流形成を目指す、本学の「極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門教育成プログラム」が採択されました。SGU事業と相まって、この展開力事業によって、本学の国際化の方向性と強みを築いていきたいと考えています。

このSGU事業の期間は10年であり、立案申請の時から、「近未来戦略150」の具体的戦略と位置づけて構想してき

ました。この事業の骨格を成すのは、1-4-4改革プランと呼ばれる、全体を統括する1つのガバナンス改革プラン、基本となる4つの教育改革プラン、そしてそれに横串を刺す4つのシステム改革プランです。すでに、その内容については、ホームページ等を通じて、皆さんにも紹介済みですが、4つの教育改革プランとは、NITOBEd教育システムによる先進的教育の実施、異分野連携による「国際大学院」群の新設、ラーニング・サテライトの機動的開設、サマー・インスティテュートの展開です。また、4つのシステム改革プランは、全学的な教学マネジメント体制の整備、人事制度の国際化、国際対応力の高度化と国際広報力の強化です。そして、ガバナンス強化プランとして、この事業を統括する「HUCI統括室」を、すでに研究大学強化促進事業のために昨年2月に設置済みの、総長直轄組織である「大学力強化推進本部」に置き、この推進本部を通じて、本学の研究及び国際化の推進を図る体制を構築しました。さらに、総長直下に「総合IR室」を設置し、学内の教育・研究をはじめ様々な情報収集・分析を行い、それを集約し活用する準備を始めています。この活動が、私の総長就任時に抱負として述べましたように、教員の研究時間の確保の一助となればと願っています。

平成27年度には、これらの活動をより機動的に推進するために、既存の創成研究機構、高等教育推進機構に加えて、4月には産学連携地域協働機構を発足させ、年内には国際連携機構を創設して4機構体制を構築し、本学の研究、教育、社会貢献及び国際化の更なる飛躍を図りたいと考えています。

研究推進の面では、3月末には、北キャンパスエリアに建設中でありました「フード&メディカルイノベーション国際拠点」が完成し、その中でセンター・オブ・イノベーション（COI）事業等を活用した「食と健康」に関する大型産学官協働研究開発が推進されます。これによって、産業創出を目標とする産学官協働が開始されます。また、これを機会に、産学連携地域協働機構を4月に立ち上げ、創

成研究機構から分離し、前者においては産業創出産学共同研究を、後者においては先端融合研究の推進を図る体制を構築します。この新機構を地域との協働を進めるための拠点として、人文社会系を中心に道内のいろいろな地域において行われている社会貢献活動の情報等を集約して、より効果的な活動を推進し、同時に、北海道立総合研究機構（道総研）や北海道との間の人事交流を視野に入れた連携強化を図ります。

また、新たな本学の強みを創出する観点から、4月には、創成研究機構内に「北極域研究センター」を設置し、国内外における北極域研究の推進拠点となることを目指します。同センターは、国立極地研究所と海洋研究開発機構（JAMSTEC）との協働体制を構築することとしています。

ここで、昨年1年間を振り返って、改めて国立大学法人を取り巻く社会状況に目を転じますと、昨年当初に中央教育審議会において審議まとめの出された「大学のガバナンス改革の推進について」に基づいて、6月には学校教育法と国立大学法人法の改正がなされ、教授会の役割、経営協議会の構成、学長選考会議の役割等が見直されました。これについては、本年4月の施行に向けて、本学としても、学内規程の改定を行っているところです。また、第3期に向けた運営費交付金のあるべき姿については、現在、産業競争力会議の新陳代謝・イノベーションWGと文部科学省に設置された有識者会議で議論されており、本年6月にはその骨格が定まる予定です。その結論は、国立大学法人の第3期中期目標・中期計画期間の活動を規定するものとなるでしょう。

さらに、中央教育審議会では、昨年12月に、教育再生実行会議の提言を踏まえた、大学入試改革の新たな方向性として、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」と題する答申を發出しています。極めて斬新な理想を掲げた答申となっていますが、これに対して、拙速な批判を繰り返すのではなく、建設的で具体的な提案を示していく責務が国立大学側にあると感じています。これに対しては、皆さんの建設的な議論を頂戴したいと思います。

来る4月からの、平成27年度は、第2期中期目標期間の認証評価を受ける年度であり、第3期の中期目標・中期計画を立案する年でもあります。私が述べました抱負に対しまして、皆さんの良き批判・良き知恵を頂いて、これに当たりたいと考えます。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、平成27年が北海道大学の将来に向けての、さらなる踏み出しの年となることを祈念しますとともに、教職員ならびに学生・大学院生の皆さんにとって実り多い年であることを心より願い、新年の挨拶とさせていただきます。

新年交礼会の様子

1月5日（月）、山口総長の年頭の挨拶とともに、新年交礼会が始まりました。会場となった百年記念会館大会議室には、役員、部局長等が大勢集まりました。



乾杯の発声をする三上 隆理事・副学長

■全学ニュース

大学入試センター試験の実施

平成27年度の大学入試センター試験が、1月17日(土)・18日(日)の両日、全国一斉に実施されました。

本学においても、大学入試センター試験実施体制により、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を設置し、本学教職員等延べ約1,300人の協力を得て、平穩のうちに終了しました。

全国の志願者は、前年度より1,540人

減少し559,132人でした。道内の志願者は、前年度より593人減少し18,699人となりました。

本学が担当する試験場(藤女子大学試験場を含む)の志願者数は、昨年より357人少ない5,489人で、各試験場(会場)の受験状況は次のとおりです。

(学務部入試課)



雪が降る中、激励する在学生

平成27年度大学入試センター試験受験状況

試験場(会場)名・志願者数	日 程		1月17日(土)										1月18日(日)									
			地理歴史、公民				国語	外国語 【筆記】	英語		英語 【リスニング】 再開テスト	理科①		数学①		数学②		理科②				
			地理歴史、公民 (2科目受験者)		地理歴史、公民 (1科目受験者)				【リスニング】 再開テスト			理科①		数学①		数学②		理科② (2科目受験者)		理科② (1科目受験者)		
			受験した者の人数	受験した者の人数	受験した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数			
北海道大学試験場	農学部会場	700	572	63	65	663	37	659	41	650	50	11	689	614	86	576	124	0	561	139		
	人文・社会科学総合教育研究棟会場	787	12	610	165	712	75	727	60	718	69	2	785	687	100	650	137	607	60	120		
	理学部会場	383	37	253	93	334	49	354	29	350	33	0	383	326	57	310	73	324	0	59		
	工学部会場	672	0	621	51	627	45	625	47	616	56	0	672	559	113	532	140	519	40	113		
	高等教育推進機構A会場	810	0	717	93	746	64	753	57	736	74	73	737	695	115	642	168	614	0	196		
	高等教育推進機構B会場	831	547	0	284	752	79	750	81	734	97	679	152	698	133	519	312	6	0	825		
	高等教育推進機構S会場	460	0	384	76	390	70	386	74	356	104	40	420	41	419	22	438	0	0	460		
	高等教育推進機構N会場	14	3	9	2	13	1	13	1	13	1	2	12	9	5	9	5	6	1	7		
藤女子大学試験場	500	373	0	127	434	66	450	50	444	56	381	119	433	67	364	136	8	76	416			
札幌地区 小計	5,157	1,544	2,657	956	4,671	486	4,717	440	4,617	540	1,188	3,969	4,062	1,095	3,624	1,533	2,084	738	2,335			
		81.5%		18.5%	90.6%	9.4%	91.5%	8.5%	89.5%	10.5%	23.0%	77.0%	78.8%	21.2%	70.3%	29.7%	54.7%		45.3%			
北海道大学水産学部試験場	332	47	250	35	305	27	309	23	308	24	94	238	306	26	296	36	197	104	31			
合 計	5,489	1,591	2,907	991	4,976	513	5,026	463	4,925	564	1,282	4,207	4,368	1,121	3,920	1,569	2,281	842	2,366			
		81.9%		18.1%	90.7%	9.3%	91.6%	8.4%	89.7%	10.3%	23.4%	76.6%	79.6%	20.4%	71.4%	28.6%	56.9%		43.1%			

※欠席した者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

第17回北海道大学・ソウル大学 ジョイントシンポジウムを開催



全体会での集合写真

第17回北海道大学・ソウル大学ジョイントシンポジウムを、11月27日（木）～29日（土）の3日間にわたり、本学で開催しました。本学とソウル大学は、1997年に大学間交流協定を締結し、これを記念して1998年に第1回合同シンポジウムを札幌で開催して以来、毎年交互に当番校となって合同シンポジウムを開催しており、今年で17回目となります。

11月27日（木）に開催された全体会では、テーマを「University's Role in Contribution for Developing Countries and International Cooperation（大学の途上国貢献と国際協力）」とし、本学の山口佳三総長及びソウル大学のNak-in Sung総長の挨拶に続き、本学獣医学研究科の奥村正裕教授、ソウル大学社会科学部のSang-Hoon Ahn教授

による基調講演が行われました。引き続き行われたレセプションでは、本学の学生サークル「アウロラ」「北海道大学合唱団」の音楽演奏や歌の披露が行われるなど和やかな雰囲気の中、両大学の研究者・学生がより身近に交流を深めることができました。

全体会に加え、シンポジウム期間中（一部のものを除く）には、文系から理系にわたる幅広い分野で、18に及ぶ分科会が開催され、それぞれの分野において、教員、研究者、学生等による研究発表や活発な意見交換が行われました。中には、本学、ソウル大学以外の国内外の大学・機関からの参加があった分科会もあり、より広い視点からの議論を行うことができました。

第17回目を迎えた本シンポジウムは、質・量ともに充実し、教員だけで

なく、若手研究者や学生にとっても研究成果を発表する貴重な機会となり、本学とソウル大学との交流促進の大きな原動力となりました。今後も本シンポジウム開催を通じて、韓国屈指の有力大学であるソウル大学との連携・協力関係を強めていきます。

（国際本部国際支援課）



山口総長による全体会挨拶



獣医学研究科 奥村教授による基調講演



学生サークル「アウロラ」によるマンドリン演奏



学生サークル「北海道大学合唱団」による合唱披露

分科会1

The 10th year commemorative workshop on mechanical and aerospace engineering

第10回記念 ソウル大-北大 機械工学と航空工学に関するシンポジウム/工学研究院 教授 大島伸行

本分科会10回目を記念して、本学の成田吉弘教授、ソウル大学のWool Lee教授による記念講演のほか、両大学教員より10件の学術講演及び大学院生による22件のポスター発表を行い、両校38名の参加者により多くの活発な

議論がなされました。また、ソウル大学の参加者11名が本学施設見学としてロボテックス・ダイナミクス研究室（人間機械システムデザイン部門）及び電子線形加速器施設 LINAC（量子理工学部門）を訪問されました。

講演会後の懇親会、交流会には教員・学生25名が参加し、両国の機械・航空工学分野の学術・産業に関する有意義な議論を交わすとともに、ダブルディグリー制度などの両校交流を一層深める検討がなされました。



学生ポスターセッション発表者と参加者



記念講演をした成田教授（左）、Lee教授（右）

分科会2

Frontiers in Chemical Sciences 2014 @ SNU & HU

化学の最前線2014/理学研究院 教授 佐田和己

11月28日（金）にフロンティア応用科学研究棟の鈴木章ホールにて、日韓の教員、大学院生40名以上の参加者を集めて本分科会を開催しました。本学からは教員10名（理学研究院7名、工学研究院2名、電子科学研究所1名）が参加し、基調講演1件と招待講演6件を、大学院生15名がポスター発表を、ソウル大学からは教員4名が基調講演1件と招待講演3件を、大学院生5名がポスター発表を行いました。計算化学から材料、生物にわたる広い学術領域で、材料の設計、物性・機能評価、さらに最新の分光学的手法によるナノ構造やその特異な物性の解析な

ど、両大学の化学関連部門が強みとする分野における最新の成果が発表されました。

今回も前回同様、大学院生による各2分間のポスターパレード（口頭発表）があり、制限時間を守り、緊張気味ながら研究成果を一生懸命アピールする姿が印象的でした。講演では、制限時間を超えて熱心な質疑応答が行われました。ポスター発表では、大学院生間で懇親会直前まで討論が交わされ、両大学間の今後の協力関係について、次世代の若い力を心強く感じる機会となりました。

懇親会においても、日韓の教員、大

学院生との歓談の中で今後の相互訪問や共同研究、次回シンポジウムに関する提案も出され、両大学間協力関係の今後のさらなる発展が期待される、双方にとって実り多いシンポジウムでした。



シンポジウムでの集合写真

分科会3

Toward understanding of our environment

地球環境理解に向けて／理学研究院 講師 佐々木克徳

本分科会では「地球環境理解に向けて」というテーマで、計14件の研究発表を行いました。午前は環境科学院において大気海洋化学についてのサブセッションを開催しました。このサブセッションは本学の吉川久幸教授による歓迎の挨拶で始まり、本学とソウル大学からそれぞれ2名が各々の研究について口頭発表を行いました。午後は理学研究院に会場を移し、前半のサブセッションでは本学から2名、ソウル大学から2名が地震学についての口頭発表を行いました。後半のサブセッ

ションでは本学とソウル大学からそれぞれ3名が北西太平洋域に注目した海洋物理学について口頭発表を行いました。また研究発表以外に、今年度からの新たな試みとして環境科学院と理学研究院の研究室ツアーを開催し、観測機器や実験装置の見学を行い、交流を深めました。

分科会の最後にはソウル大学のYang-Ki Cho教授が、今年度の若手研究者・大学院生の活発な発表と討論への賛辞と、来年のソウル大学での分科会における再会を約束して閉会となりました。

ました。出席者数はサブセッションによりばらつきがありますが、20～30名程度でした。今後とも両校の友好的な関係を維持するように努めていきたいと考えています。



午前中のサブセッションでの集合写真

分科会4

Frontiers in Pharmaceutical Sciences and Nanotechnologies

ナノテクノロジーと薬学研究の最前線／薬学研究院 特任准教授 梶本和昭

11月28日（金）に開催した本分科会は今回で5回目であり、今回のジョイントシンポジウム分科会はソウル大学のYu-Kyoung Oh教授との2国間交流事業（共同研究）の一環として行いました。本学からは薬学研究院だけでなく、遺伝子病制御研究所の樋田京子特任准教授が主宰する血管生物学研究室と工学研究院の渡慶次学教授が主宰する生物計測学研究室からも研究員及び大学院生が参加しました。シンポジウムでの発表者は過去最多の17名（ソウル大学9名、本学8名）にのぼり、非常にタイトなスケジュールでしたが、終日にわたって活発な討論が展開されました。

2年前の第15回ジョイントシンポジウムの際に導入した優秀発表賞の選考

を本年も継続して行い、ソウル大学のRezwanul Haque Rony氏（博士課程2年）と本学の山内 順氏（博士課程3年）が優秀賞を受賞し、またソウル大学のMi-Gyeong Kim氏（博士課程3年）が特別賞を受賞しました。選考はこれまでと同様に教員、博士研究員、大学院生、学部生を含む全聴衆の投票による総選挙方式で行っており、受賞した3名の発表は高く評価されるに相応しい内容で、聴衆として参加した多くの学生の目標となるものであり、盛会裡に終えることができました。

今後もこのような国際的友好関係を継続的に発展させるとともに、両校の若手研究者・大学院生が互いに刺激し合うことで切磋琢磨する「協調と競争の関係」を構築できるよう努めます。



参加者の集合写真



優秀発表賞受賞者の記念撮影

分科会5

Teaching and learning support strategies in the era of globalization

グローバル時代における教育・学習支援の方略／高等教育推進機構 教授 細川敏幸

本分科会は、11月28日（金）午前10時から情報教育館4階の共用多目的教室（1）で開催しました。このシンポジウムは今回で6回目になります。本学から7名、ソウル大学側から3名の参加者がありました。

本学からは細川敏幸教授によるkeynote speechの後①Introduction of Nitobe College（新渡戸カレッジの導入：川畑智子准教授）、②Introduction of Nitobe School（新渡戸スクールの紹介：地球環境科学研究所 山中康裕教授）、③Activity of the Academic Support Center（アカデミックサポートセンターの活動：アカデミックサポートセンター職員 清水将英）、④Cooperated Learning System by Seven Universities（7大学連携教育：北海道地区国立大学連携教育機構職員 小

池貴行、山本堅一、藤井哲之進）について報告しました。ソウル大学からは⑤Writing Programs for Foreign Students（留学生のための韓国語指導：Hyung Jin Lee教授）、⑥The current condition and improvement plan of English-mediated classes in SNU for the era of globalization（グローバル化に対応した英語による授業の現状：Heewon Lee教授）が報告されました。

①及び②の新渡戸カレッジ並びに新渡戸スクールについての話は、国際化の観点から韓国側から強い興味が示されました。②では一学期に2,000名に及ぶ相談者の数に驚き、③の遠隔授業の試行についても質問が寄せられました。一方、ソウル大学には2,700名（16.4%）の留学生がおり⑤のプログラムが効果を上げています。また、⑥

英語による授業（English-mediated class）は学部教育全体の12%に及び本学との大差を知るようになりました。Closing SpeechはProf. Deogsu Kim（CTL センター長）により、お互いの大学の国際化の進展と教育学習センターの役割についてまとめられました。来年も、さらに充実したシンポジウムを企画運営していく予定です。



Lee教授の発表の様子

分科会6

How individual liberty / liberalism theory and community / communitarism meet together in Europe and East Asia

個人的自由/自由主義と共同体/共同体主義の、西洋とアジアにおける出会い／文学研究科 准教授 村松正隆

本分科会は2013年12月にソウル大学で開催された分科会を引き継ぐもので、本年度は、11月28日（金）に、本学で行いました。本学より2名、ソウル大学より3名の発表者があり、その他、本学からも多くの教員、大学院生が参加して、活発な討議がなされました。

午前中は、東京・ソウル・北京で行われたアンケート調査をもとに、日韓中3カ国での、共同体意識の世代ごとの差異を、実証的に明らかにするソウル大学のHan Sang-Jin名誉教授、宗教者の社会的紐帯の創造への積極的寄与の意義を論じた本学の櫻井義秀教授の発表が行われ、共同体意識のアジア的特質とはいかなるものかについて、議論がなされました。午後は、韓国の若い世代を、困難な条件の中で生き残りを図る“survival generation”と特徴づ

け、その意識を探るKim Hong-Junソウル大学准教授、丸山真男に依拠して、日本における自由主義の受容とナルシズムの問題を論じる村松正隆准教授、具体的データをもとにして、世界各国の自発的結社の紐帯の性質を比較するKim Seo-Kohソウル大学准教授の発表が行われました。こうした議論の中で、民主主義、自発的結社といった理念を肯定的に受けとめて良いのかといった疑念も提出されつつ、活発な議論がなされました。

昨年に引き続いて行われた本分科会は、終始和やかかつ活発な雰囲気の中で進行しました。自由主義の進展と共同体意識の変容という重要なテーマについて、意見を交換することができたことは、大変意義深い機会でありました。来年度は、さらに若い大学院生なども交え、規模を拡大して本分科会を

開催することを約束しつつ、終了しました。



Hanソウル大学名誉教授の発表



集合写真

分科会7

Production, Function and Safety of Food

食の生産、機能および安全／農学研究院 教授 小林泰男

本分科会は「食の生産、機能および安全」をテーマに11月28日（金）に農学院にて開催しました。ソウル大学からは農業生命科学部のSangryeol Ryu教授を代表とする5名の教員が、本学側は農学研究院の教員4名が、講演と司会進行を担当しました。本学から43名（うち7名が教員）が聴衆として参加し、休憩をはさみ夕方まで活発な質疑応答がありました。

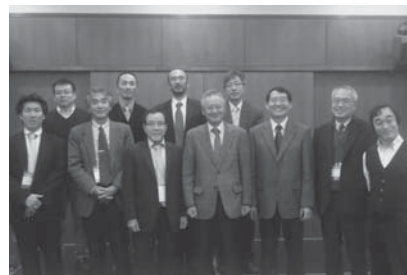
この分科会では、「食の生産」を動物繁殖や育種からの視点で扱った2題、「食の機能」を食肉の熱産生や希少オリゴ糖産生の紹介から扱った2題、最後に「食の安全」について、食中毒菌の新規検出法並びに病原性発現

機構を扱った2題、計6題の講演を行いました。

両大学の気鋭の研究者交互によるレベルの高い話題提供となり、これら6題の講演に計14件の質問が寄せられ（うち6件は本学の学生から）、議論は非常に深く活発なものになりました。討議は、提供された講演内容の理解促進のみならず、研究者相互のネットワーク形成も促し、意義深いものとなりました。特に学生の積極性に格段の進歩がうかがえました。これを受けて、次回のソウル大学での開催から、両大学からの学生のミニ講演を新たに配置することで合意形成できました。



講演風景



主な講演者及び司会者

分科会8

The 3rd HU-SNU Joint Symposium on Materials Science and Engineering

第3回材料科学に関する合同シンポジウム／工学研究院 准教授 橋本直幸

本シンポジウムは、工学研究院材料科学専攻とソウル大学工科大学材料工学科との間で平成24年度から開始され、本年度は11月28日（金）に工学研究院・工学院主催で開催しました。

ソウル大学・本学双方から計11名の教授・准教授より学術講演として材料科学に関する最新の研究紹介があり、例年通り活発な議論がなされました。今回は、本学の教員及び大学院生、計10名によるポスター発表も行われ、ソ

ウル大学の先生方からの鋭い質問に一生懸命対応した学生たちの中から、優秀な3名にポスター賞が贈られました。教員はもとより参加した大学院生にとっても有意義なシンポジウムになりました。次年度からは、これまで実績のある大学院生のインターンシップに加え、博士課程学生によるシンポジウムや一部の研究分野で計画中のサマープログラムに合わせて、ソウル大学の大学院生を受け入れるといった学

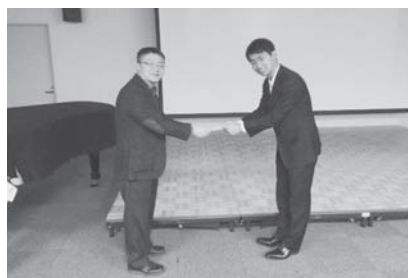
生間の交流事業について具体的に進めたいと考えています。



磯部繁人助教による講演



松島永佳准教授による講演



優秀ポスター賞表彰の様子



参加者による記念撮影

分科会9

The 10th HU and SNU Symposium on Mathematics -Recent progress on theory of probability and partial differential equations-

確率論と偏微分方程式論における最近の進展／理学研究院 教授 利根川吉廣

数学専攻として今回は第10回目となるジョイントシンポジウムであり、ソウル大学から4名の教員と10名の大学院生が参加し、本学からは教員や大学院生19名、他大学（東京大学、富山大学、早稲田大学）から3名の参加者を得て行いました。双方の教員による7つの30分講演と、研究員や大学院生による6つの15分講演を行い、昼休みの時間を利用して学生によるポスターセッションも行いました。確率微分方程式に付随する熱核評価、非線形楕円型微分方程式の正則性理論、調和関数の境界極限の解析などについての最新の

研究成果が発表され、活発な議論が行われました。若手の参加者が多く、彼らにとって非常に有意義な国際的研究交流となりました。



講演の様子

研究集会後の懇親会は和やかな雰囲気です。大学院生同士が自主的にフェイスブックの情報を交換するなど、今後の人的交流の基礎が醸成されました。



ポスターセッションの様子

分科会10

Advanced research for prevalent infectious diseases

流行する感染症に向けた先端研究／獣医学研究科 准教授 岡松正敏

11月28日（金）午後1時30分から、獣医学研究科講義棟講堂において、獣医学研究科の分科会を開催しました。発表に先立ち、稲葉 陸獣医学研究科長とソウル大学のPan Dong Ryu学部長の開催の挨拶がありました。

今回は本学から3名、ソウル大学から2名の合計5名の教員により、獣医学の感染症分野における最新の研究成

果の発表がありました。高病原性鳥インフルエンザやエボラウイルス感染症の発表については、特に非常に活発な議論がなされました。本分科会には全体で45名の参加者があり、2大学における感染症研究の先端を担う教員の研究成果に耳を傾けていました。獣医学研究科が進めているリーディングプログラムにも関連するような内容だった

ため、大学院生、特に留学生の参加が多く、本分科会を盛会裡に終えることができました。

来年度以降も、引き続きトピックを変えながら取り組んでいく予定です。本分科会の開催にあたり多大なご尽力をいただいた関係の皆様へ、心から感謝します。



参加者の集合写真



シンポジウム会場の様子

分科会11

Endocrine disruptors and health effects among susceptible population

内分泌かく乱化学物質曝露による健康影響：特に脆弱な人々への影響／環境健康科学研究教育センター 特任教授 岸 玲子

環境健康科学研究教育センターでは、初めて分科会を開催しました。11月28日（金）遠友学会にて、「内分泌かく乱物質曝露による健康影響：特に脆弱な人々への影響」をテーマに行い、ソウル大学公衆衛生大学院環境健康学部からKyungho Choi教授、Sungkyoon Kim教授、Kiyoung Lee教授の3名が来日しました。環境健康科学研究教育センターから5名、北海道立衛生研究所食品科学部食品安全グループの小島弘幸主幹を加えた、計9演題の発表と総合討論を行いました。

分科会代表であるChoi教授、岸 玲子特任教授がそれぞれ進める、両国の内分泌かく乱物質のばく露と子どもの健康に関する疫学研究の紹介とその成

果、Lee教授からは日用品使用による化学物質曝露のリスク評価、小島主幹からは核内受容体を介した内分泌かく乱物質の影響に関する細胞実験の報告がありました。本分科会には、農学院、環境科学院の大学院生、工学研究院の教員、北海道立衛生研究所の研究員など総勢22名が参加し、活発な質疑応答が行われました。自由討論では今後の研究・教育協力に関して、来年度以降の分科会の継続開催、研究情報交換を目的としたオンラインセミナーの開催、研究者の相互派遣による人的交流を推進していくことに合意するなど、今後の共同研究・教育に向けて大きな成果を得ることができました。



参加者の集合写真



ソウル大学 Choi教授の講演

分科会12

Global Cooperation Between Universities

大学の海外展開における協力／国際本部 総長補佐 長野克則

本分科会は、ソウル大学と本学の国際担当教職員が、大学の国際化に関するそれぞれの大学の現状及び戦略について、情報・意見交換を行う場として、第8回ジョイントシンポジウムより開催しており、今回で9回目となりました。ソウル大学のJong-Ho Jeong国際本部長、及び本学の長野克則国際本部総長補佐を座長とし、「Global Cooperation Between Universities」をテーマに、両大学より13名の教職員が参加しました。

分科会は本学の島竜一郎国際本部副本部長より本学の国際化の状況、サマーインスティテュート等今後の戦略などについて発表がありました。引き

続き、ソウル大学のMinki Kim国際協力本部国際協力戦略チーム課長より、ソウル大学が2007年より実施するサマーインスティテュートの紹介がありました。

その後、プレゼンテーションへの質疑応答に加え、両大学で行われているプログラムを利用した具体的な学生交流強化に向けた活発な議論が行われ、今後両大学のサマープログラムについても相互に情報交換することを約束し、終了しました。

今回のセッションでの情報交換及び意見交換を、今後の両大学のさらなる交流強化に繋げていきたいと考えています。



発表する島副本部長



発表するKim課長

分科会13

The 9th Japan-Korea International Symposium in Ophthalmology

第9回日韓眼科シンポジウム／医学研究科 診療准教授 南場研一

12月1日（月）午後5時から医学研究科中央研究棟3階セミナー室において分科会「第9回日韓眼科シンポジウム」を開催しました。本学から教員8名、医員7名、大学院生3名が、ソウル大学からHyeong Gon Yu教授、Eun Kyung Lee先生、Seung Young Suh先生の3名が参加されました。開会の挨拶の後、本学の石田 晋教授による「Unilateral acute idiopathic maculopathy (UAIM)：片眼性急性特発性黄斑症」についての講演、また、ソウル大学のHyeong Gon Yu教授による「ぶどう膜炎に対する徐放性ステロイド薬硝子体内注射」に関する講

演が行われました。その後は各10分の演題が本学から8題、ソウル大学から2題が発表されましたが、最新の話題や興味深い演題が多く、活発な議論が行われました。同じアジアで臨床研究・基礎研究に真摯に取り組んでいる姿勢に若い日本の眼科医も良い刺激を受けたことと思います。

シンポジウム後の懇親会では双方の眼科医療事情や生活習慣の違いなどについてお話しするとともに親睦を深めることができました。また、翌日2日（火）にはぶどう膜炎の難治症例について症例検討会を行い、本学から3症例、ソウル大学から3症例の呈示がな

され、こちらも活発な討論をすることができました。

来年はソウル大学にて第10回日韓眼科シンポジウムを行う予定です。



参加者による記念撮影

分科会14

The 2nd seminar on Renewable energy and Indoor Air Environment for Comfort and Energy Conservation in Buildings

第2回建物の快適性と省エネルギーのための再生エネルギーと室内環境に関するセミナー／工学研究院 助教 姜 允敬

環境システム工学研究室では、分科会を12月1日（月）・2日（火）に開催しました。

ソウル大学からは建築学専攻建築環境計画研究室のKim Kwangwoo教授、大学院生（博士課程4名）、Sung KyunKwan大学のCheol Soo Park准教授、SUNMOON大学のYoung Jin Kim助教が参加しました。

本研究室からは長野克則教授、葛隆生准教授、博士研究員（外川純也、鍋島佑基、劉 洪芝）、博士課程の学生2名、修士課程の学生10名、学部4

年生5名が参加しました。研究発表の前にKim教授と長野教授が研究室のコンセプト、目標と最近の研究テーマの紹介を行い、省エネルギー換気装置、室内温熱環境、室内空気環境に関する研究について発表を行いました。

具体的には、ソウル大学では主に放射冷・暖房パネルに関する研究を行っており、シミュレーションによる放射冷パネル評価、エネルギー使用量の評価及び予測、文化財保存のための古墳内部の室内環境評価について発表しました。本研究室では地中熱ヒートポン

プシステム、デシカント換気エレメントの性能評価、地下通路の室内環境について発表しました。また、研究室や実験室の見学会も行い、懇親会ではソウル大学の研究室の皆様と楽しい時間を過ごすことができました。

本分科会は、今後の持続的な交流を促進する意味でも効果的な機会でした。今後も、両大学による持続的な研究・教育の発展のために持続的な交流を行い、来年はソウル大学で第3回シンポジウムを行う予定です。



口頭発表の様子



会場での集合写真



懇親会の様子

分科会15

NTNU-HU-SNU Joint Symposium on Science Education Science Education in Various Contexts: The Next Generation

様々な状況で展開される次世代の科学教育／教育学研究院 教授 大野栄三

本分科会は、分科会代表者のひとりである台湾師範大学科学教育センター長のChun-Yen Chang教授の招きにより、台湾の宜蘭県で12月3日（水）に開催されました。台湾での開催は今回が2回目です（前回は、第14回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム分科会）。

香港教育学院のCher-Ping Lim教授の基調講演から始まり、「社会文化的コンテキストと科学教育」「授業改善のためのカリキュラム、教材の分析と開発」「多様なコンテキストでの学習・問題解決の過程」「科学教育と科

学教育研究への先進技術の応用」「教室における教師の役割と教師と生徒の相互作用」「科学で取り囲む：日常生活における科学の学習」のセッションが設けられ、18件の口頭発表（日本、韓国、台湾から各6件）、8件のポス



分科会の様子

ター発表（本学からの1件を含む）がありました。

分科会代表者であるソウル大学のChan-Jong Kim教授からの提案で、今回はタイで開催される国際会議の中で本分科会を開催する予定です。



懇親会終了後の集合写真

分科会16

2nd HUH-SNUH Joint Symposium

第2回北海道大学病院－ソウル大学病院ジョイントシンポジウム／北海道大学病院長 寶金清博

12月4日（木）・5日（金）に「第2回北海道大学病院－ソウル大学病院ジョイントシンポジウム」を開催しました。今回は、本年7月に部局間交流協定を締結した台北医学大学双和医院が特別参加し、日本、韓国、台湾によるシンポジウムとなりました。

分科会の前日には、北海道大学病院ツアーとして、腫瘍センター、臨床研究開発センター、陽子線治療センター、歯科診療センターの見学を行い、本院の集学的・診療科横断的治療や、臨床研究を支える施設・体制、最先端のがん治療施設などについて紹介しました。その後の懇親会では終始和やかな雰囲気の中、専門分野を超えて情報交換がなされました。

分科会は本院の寶金清博病院長とソウル大学病院の吳 秉熙病院長との開催の挨拶で始まり、「Globalization of Medicine: Education and Patient Care（医療のグローバル化：教育と患者ケア）」というテーマのもと、「Medical Education System（医学教育システム）」「International Patient Care（国際的な患者ケア）」「Nursing Care（看護ケア）」「Novel Cancer Therapy（最先端がん治療）」と題した4つのセッションから構成されました。ソウル大学、台北医学大学、本院から多数の教員、研究員、医療関係者等の参加があり、各セッションの終わりには他職種間での質疑がなされ、各大学での特徴的な取り組みも踏まえた活発な意

見交換が行われました。

最後に、吳病院長から閉会の挨拶があり、ソウルでの第3回ジョイントシンポジウムの開催を約束し、成功裡に終了しました。今後も両大病院間の連携強化のみならず、3大学間の緊密なネットワーク構築によるさらなる発展が期待されます。



院内見学ツアーの様子



参加者による集合写真



吳病院長による挨拶



台北医学大学 吳 志雄病院長による講演

分科会17

Where Did Ukrain Come From? Where Is Ukrain Heading For?

ウクライナはどこへ/スラブ・ユーラシア研究センター長 家田 修

12月6日(土)にスラブ・ユーラシア研究センターとソウル大学のロシア・東欧・ユーラシア研究所(IREEES)との合同分科会がスラブ・ユーラシア研究センター大会議室で行われました。今回はソウル大学アメリカ研究所からYi Okyeon 所長ほか2名の参加もあり、議論に奥行きが増しました。

はじめに両組織の代表である家田修スラブ・ユーラシア研究センター長とShin Beom-Shik IREEES所長による開会の辞があり、このような研究集会で両組織の協力を継続することの意義深さが確認されました。

分科会は3部で構成されました。第1部ではウクライナ危機をロシアとアメリカの外交の視点だけでなく、ウク

ライナ内部の経済構造からも考察する報告がありました。韓国人研究者が、ウクライナ東部の「非承認国家」やロシアによるクリミア併合を北朝鮮との統一の問題と関連付けていたのは興味深く思われました。第2部は歴史、第3部は文学をテーマとし、ウクライナ自体の民族的・宗教的な多様性に加え、ロシアとウクライナそれぞれのナショナリズムの起源がいかに複雑に絡み合っているかを深く議論することができました。

当日はスラブ・ユーラシア研究センターに滞在する外国人研究員や大学院生を含む25名(うち外国人10名)が参加し、活発な議論を交わし親睦を深めました。



第1部の様子



会議終了後の記念撮影

分科会18

4th Joint Symposium on Public Health and Sustainability

第4回パブリックヘルスとサステナビリティに関するシンポジウム/医学研究科 助教 大林由英

1月16日(金)、医学研究科臨床大講堂において、本年度で通算4回目となる本分科会を開催しました。本分科会は、2010年に行われた、サステナビリティ・ウィーク2010における、医学研究科とソウル大学公衆衛生大学院との交流をきっかけとして企画されたものです。

今回はシンポジウムとの併設企画として、本学大学院共通講義「社会と健康Ⅱ(研究方法科目)疫学Ⅱ」及び「社会と健康Ⅱ(研究方法科目)研究

調査法Ⅱ」を1月13日(火)~20日(火)の間に開講しました。

ソウル大学に加えて、大学間交流協定校であるスリランカのペラデニヤ大学からも、それぞれ教員1名と大学院生5名を招聘し、講義・演習をともに実施しながら、各大学からの若手の研究発表を募る形でシンポジウムを開催しました。

健康の社会的決定要因や、保健人口学的なアプローチから、開発途上国でもそのスピードを増している高齢化社

会へ向けた保健医療のあり方などについて、約20名の参加者による活発な討論が行われました。

これまで交互に開催を重ねてきたソウル大学との本分科会の実績が、今年度は2国間にとどまらず、より国際的な連携の幅を広げることにつながったと考えています。今後も両大学による公衆衛生・国際保健の持続的な研究・教育の発展に寄与すべく交流を進展させていく予定です。



討論風景: Youngtae Cho教授(ソウル大学公衆衛生大学院)とMin Jeong Kimさん(ソウル大学公衆衛生大学院生)



マインドマップを用いたグループワーク発表: 世界の感染症による健康への負担について

サステナビリティ・ウィーク2014の開催

10月20日（月）～11月3日（月・祝） 会場：附属図書館正面玄関ロビー

学術成果のオープンアクセスとHUSCAP

主催：附属図書館／実施責任者：附属図書館学術システム課 課長 片桐和子

持続可能な開発のための教育に向けて、学術成果を世界の人々と共有することができるオープンアクセスとHUSCAP（北海道大学学術成果コレクション）についてのポスター展示を開催しました。展示では「未来をつくる知の共有」をテーマに、研究者への

インタビューの他、HUSCAPによる博士論文のインターネット公表など、本学における学術成果のオープンアクセスの状況について紹介しました。HUSCAPで公開されている多様な学術成果と、教育研究成果を誰もが読むことができるオープンアクセスの意義

を、附属図書館を訪れる学内外の方々へご案内することができました。附属図書館では今後も学術成果のオープンアクセスと、それを実現するHUSCAPについての理解を深める取り組みを進めていきます。



展示風景

10月31日（金） 会場：国際本部2階大講義室

留学希望者向けセミナー SD on Campus: Invitation to Study Abroad Program

主催：国際本部長 上田一郎／実施責任者：文学研究科 教授 瀬名波栄潤

国際本部は、昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、フィリピン・デラサル大学、インドネシア・ガジャマダ大学、ベトナム・ベトナム国家大学ホーチミン校 International University, 中国・西安交通大学、オーストラリア・シドニー大学の5大学でした。平成25年から、学生の目線での情報提供を目的に、発表者を北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）で交換留学している留学生に依頼しました。

イベントでは、各大学がサステイナブル・ディベロップメント（SD：持続可能な開発）についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表

し、それぞれの特徴的な取り組みを紹介しました。

本イベントは今回で6度目の開催ですが、参加した学生に実施したアンケートでも「協定大学への留学について興味を持てた」、「北大生の活動も協定大学の取り組みにならって盛んになれば良い」などの回答が見られました。また、発表した留学生も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会ととらえて十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。参加学生のアンケートでは、来年度に講演してほしい大学の希望についても聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。



国際本部からの説明



参加者の発表風景

10月31日（金） 会場：学術交流会館小講堂

市民公開シンポジウム「都市でも農的生活—植物の面白さと豊かな生活」

主催：北方生物圏フィールド科学センター／共催：北海道園芸研究談話会／
実施責任者：北方生物圏フィールド科学センター 教授 荒木 肇

10月31日（金）に学術交流会館で、北方生物圏フィールド科学センターと北海道園芸研究談話会との共催で開催し、111名が参加しました。このシンポジウムでは近年、札幌市内での市民農園の希望者の増加や学生農業サークル活動の活発化を背景に、潤いのある生活のために、都市における農的生活の状況や将来について、学術性や国際性も織り込んだ話題提供をベースに討論を行いました。

東京農工大学の藤井義晴教授は「植物同士で成長を制御するしくみ」について話され、化学物質が植物相互の生育を阻害または促進させているアレロパシーという現象を紹介しました。この関係を上手に活用すると雑草抑制になり、有機農業や農作業効率化や新規生物農薬の創出につながると説明されました。

中国江西省花野菜研究所のザン・ユーピン助教は、「中国上海市における農業テーマパーク」について説明され、そこでは植物工場、バイオテクノロジーや近代庭園等による中国における農業発展と将来像を展示し、毎年30万人が見学に来ていると報告されました。

さとみらいプロジェクトグループの奥山 誠副施設長は「サッポロさとらんどにおける農的生活の支援活動」と題して、サッポロさとらんどが「人と農業・自然とのふれあい」や「都市と農業の共存」をテーマに、市民が農業や自然を身近に感じながら憩い・楽しむことができる魅力的な緑地空間の提供を理念に運営されており、平成7年のオープン以来、来園者が1,000万を超えたと報告されました。園内で農業体験の場を提供し、市民農園は194区画設置したものの、4倍の競争率となり、農業のある暮らしに関心が高まっていると説明されました。

市民農業講座「さっぽろ農学校」の吉岡宏直主任講師は「定年後にめざす農業活動」として、農業へ一歩進みたい人を対象に、4月～11月上旬までの毎週土曜日に農業実習（栽培技術の実践）と講義（農業全般基礎知識）を開講し、50代の受講生が多いと報告されました。また、市民農業講座「さっぽろ農学校」の卒業生が、さっぽろ農学校倶楽部やグリーンライフさっぽろのNPO法人を設立して、北大生も参画している事例を報告されました。

討論では、多様な農業へのふれあいについて意見が出され、講師の吉岡氏から札幌市の「いきいきファーマー育成事業」が平成26年度から始まり、中高年世代が農業技術を習得し、農的活動を通じて生きがいのある暮らしを実践できるように研修ほ場を設置する計画（1人が約10aを耕作）も披露されました。



会場の様子



質疑応答時の様子

11月25日（火） 会場：学術交流会館

サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2014

主催：サステイナブルキャンパス推進本部、施設部／共催：一般社団法人国立大学協会／
実施責任者：サステイナブルキャンパス推進本部 プロジェクトマネージャー 横山 隆

本シンポジウムは「サステイナブルキャンパス構築のための思想と実践—大学にとって「地域」とは—」をテーマに開催しました。

最初に、京都大学経済学研究科の植田和弘教授の講演があり、Human development（人間発達）を促す場としての大学の役割を強調されました。特に、持続可能な社会の担い手育成には、地域との協働を含む社会的学習が不可欠であり、従来の大学キャンパス

もそのための場として変化していく必要性を示されました。

続いて、ルクセンブルク大学のリアネ・ケニック博士は、そのような変化が、海外の大学でどのように起きているか、実際の例を交えた講演をされました。ルクセンブルク大学では、まさにHuman developmentを目指し、学生自らが太陽光発電組合のビジネスモデルを検証する等、地域課題に根差した教育プログラムの実践例を紹介さ

れました。

その後のパネルディスカッションでは、文部科学省大臣官房文教施設企画



集合写真

部計画課の森 政之整備計画室長、札幌市の生島典明副市長、本学の吉見宏経済学研究科長らがパネリストとして加わり、地域連携のためにキャンパスがどのように活用されるか、その可能性について議論しました。ブリティッシュコロンビア大学のCIRS (Center for Interactive Research on Sustainability) やルクセンブルク大学のベルバル新キャンパスにおける計画手法が、海外のキャンパス計画・開発の事例として紹介されました。これら

の事例は、様々なステークホルダーを巻き込んで計画の改善を行っているという点がこれからの日本のキャンパス

計画・開発において新しい切り口となる可能性の示唆がありました。



植田教授による講演の様子



ケニック教授による講演の様子

12月10日(水) 会場：農学部4階大講堂

新しい農業生産のやり方 —エコロジー農業の日仏交流—

主催：アンスティチュ・フランセ日本、札幌日仏協会／札幌アリアンス・フランセーズ／共催：農学研究院、国際本部／
実施責任者：農学研究院 教授 大崎 満

エコロジー農業の今とこれからについて、政策的な視点及び現場的な視点から幅広く議論するべく、フランスと日本・北海道のそれぞれで最前線に立つ農業関係パネリストによる公開討論会を開催し、研究者、農業者、市民、学生を含む155名が参加しました。

フランスからは、農村環境の様々な変化等を中心に40カ国以上での研究経験を持つ農学者エティエンヌ・アンズラン氏と、国土総局にて持続可能な農業の実践を指揮されるエリック・ジリ氏をパネリストとしてお招きし、日本からは、電気柵等による革新的な放牧システムをはじめとするニュージーランドのローコスト・ファーミングの導入に長年取り組まれるファームエイジ株式会社の小谷栄二代表取締役と、現

役の畑作農家である北海道十勝地区農協青年部協議会の前多幹夫副会長、農学研究院の久田徳二客員教授、北方生物圏フィールド科学センターの三谷朋弘学術研究員がパネリストとして参加しました。

農学研究院の林美香子客員教授による司会進行と、同研究院の内田義崇助教によるファシリテーションのもとパネルディスカッションが開始されまし

た。エコロジー農業の定義について、単独の農業技術ではなく農業生産に関する考え方の変化自体であることや、エコロジー農業を普及していくために必要な政策や消費者の理解などについて議論がなされました。最後の質疑応答では、時間いっぱいまで多くの質問が行われ、また、終了後も来場者が個人的な質問をパネリストに直接行っている様子がしばしば見受けられました。



参加者の集合写真



質疑応答の様子

12月19日(金) 会場：フロンティア応用科学研究棟レクチャーホール

日露共同で行う教育プログラム開発プログラム —極東・北極圏における持続的発展を未来につなぐ—

主催：北海道大学／実施責任者：文学研究科 教授 望月恒子(副学長)

今年度採択された本学の世界展開力強化事業「極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家庭教育プログラム (East Russian-Japan Expert Education Program: RJE3プ

ログラム)」関連シンポジウムを開催しました。

本シンポジウムには、RJE3プログラムのロシア連携5大学である極東連邦大学、北東連邦大学、イルクーツク

国立大学、サハリン国立大学、太平洋国立大学の学長・副学長・教員等15名を含む90名が参加しました。

はじめに山口佳三総長から挨拶があり、当プログラム事業推進責任者であ

る望月恒子副学長、及び本学と長期にわたり様々な共同研究実績を持つロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所のビョートル・バクラーノフ所長に基調講演をいただきました。望月副学長は、RJE3プログラムで育成する人材のビジョンと体制、及び本学の戦略との関係性などを含め概要について紹介しました。バクラーノフ所長からは「ロシア太平洋地域：長期的視点で見た開発、国際共同のための地理学的・地政学的な強みと課題」として、本プログラムが対象とする地域における様々なデータを元に、その可能性と課題についてお話しいただきました。

続くパネルディスカッション第1部では、本プログラムのコンセプトにご賛同いただいている日露の学術、産業、経済各界を代表する方々（北海道庁経済部経営支援局国際経済室 小玉

俊宏室長、北海道銀行国際部ロシア室中川文敏調査役、在北海道サハリン州政府代表部 クトヴォイ・アンドレイ代表、北東連邦大学 プリシヤズニ・ミハイル副学長、本学工学研究院 瀬戸口剛教授）にご登壇いただき、各氏の経歴等とともにプログラムに対する期待や可能性についてお話しいただきました。

パネルディスカッション第2部では、RJE3に関連した研究を行う日露の学生（理学院博士課程2年 岩波

連さん、文学研究科修士課程1年 岩渕真由子さん、国際広報メディア・観光学院研究生：サハリン国立大学出身オレグ・パンコフさん、北東連邦大学経済学研究科修士課程2年 アニシア・ラザレワさん）による自己紹介の後、パネラー全員でディスカッションを行いました。育成される人材に求められること、これまでの交流と今後の展望、また学生の立場からの質問や希望等について、会場も巻き込んで活発な議論が行われました。



山口総長による開催挨拶



集合写真

12月20日（土）・21日（日） 会場：学術交流会館小講堂

先住民文化遺産とツーリズム 文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題

主催：アイヌ・先住民研究センター／共催：観光学高等研究センター、WAC Japan（世界考古学会議日本）／実施責任者：アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文

本シンポジウムは、平成24年から実施している国際シンポジウム「先住民文化遺産とツーリズム」として開催しました。第3回目となる今年の副題は、「文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題」でした。シンポジウムでは、持続可能な資源管理の側面から、近年注目を集めている先住民社会における景観利用について、スウェーデン、アメリカ北西海岸、平取町、旭川市、白老町の事例を参照しながら広く議論しました。また、先住民文化遺産の特質と、その保護・管理方法のあり方、そして地域資源として活用する可能性について、観光や地域おこしの側面からも検討を行いました。

先住民の文化的景観もしくは先住民に関わる考古学に携わる大学の研究者、博物館業務従事者、埋蔵文化財行政従事者の方々に、講演者としてご登壇いただきました。スウェーデンのウプサラ大学のニール・プライス教授とカール＝ゴスタ・オジャラ講師

は、サーミと考古学あるいは考古学遺跡から読み取れる先住民の景観利用について講演されました。また、ワシントン大学バーク博物館のスヴェン・ハーカンソン准教授とアバディーン大学のリック・ネヒト上級講師には、アメリカ北西海岸で出土したネイティブ・アメリカンに関する考古学遺物などを活かした博物館活動についてご報告いただきました。北海道の事例としては、旭川市と平取町の埋蔵文化財行政に従事されてきた旭川市の友田哲弘学芸員と平取町の吉原秀喜主幹にご登壇いただき、地域内にあるアイヌ文化に関わる資源をどのように再発見し、継承していくかについてご発表いただきました。白老町のアイヌ民族博物館の八幡巴絵学芸員からは、白老町の景観にまつわる口承伝承をご紹介いただくとともに、自然と深く関わりを持ちながら発展してきたアイヌ文化の継承に関する博物館の取り組みをご報告いただきました。

最後に、講演者全員によるパネルディスカッションが行われ、アイヌや先住民の文化遺産を特徴づける景観の保護とその適正な活用を、まさに現代及び未来の課題として考えることの重要性が確認されました。



プライス教授による講演の様子



文化的景観をめぐる総合討論の様子

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	16,536件 2,960,228,460円
基金累計額 (12月31日現在)	教職員の寄附率 33.8% (1,326件/3,921人)

12月のご寄附状況

法人等3社、個人825名の方々から9,674,400円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名 (法人等)

スワン アイクリニック、寺田医院、医療法人若林浜田クリニック

寄附者ご芳名 (個人)

合川 正幸	青木 庸治	浅島 弘志	浅野 賢二	足利 恵	池田 慎	石川 達哉	入澤 秀次
岩隈 勉	岩下 明裕	上田 一郎	上野 将司	薄田 健格	梅澤 彰	大石 哲久	大津 起夫
小倉 滋明	小内 透	小原 大和	帰山 雅秀	角田 敏男	金川 眞行	川端 禎子	河本 充司
菅野 三信	北川まゆみ	木村 中	小林 一郎	小松 知己	小松 寿幸	斉藤 久	坂村 貞雄
坂本 信行	桜井 謙介	澤田 安樹	三升畑元基	渋谷 正人	清水 智之	白尾 誠二	神保 重孝
菅原 照夫	鈴木 龍弘	須田 孝徳	須藤 進	関崎 勉	瀬名波栄潤	芹澤 優子	高島 章生
高田 礼人	高橋 光彦	高橋 幸夫	高畑 智嗣	高柳 滋治	田原 泰夫	玉垣 良三	土家 琢磨
寺澤 睦	豊田 威信	中島 達己	二階堂正直	林下 忠雄	樋口 博紀	平川 和志	平野 鉄也
二村 良彦	松崎 登	松澤 重治	三澤 一仁	皆川 宏	宮田 知己	村上 明	村守 清
望月 直樹	森田 伸行	八重樫幸一	柳川 弘行	山内 隆嗣	山崎 賢司	山城 明伸	吉崎 正人
吉田 敏雄	吉田 広志	吉田 学					

銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

(個人)

上田 一郎, 薄田 健格, 小松 知己, 坂村 貞雄, 坂本 信行, 高島 章生, 平野 鉄也, 皆川 宏

感謝状の贈呈

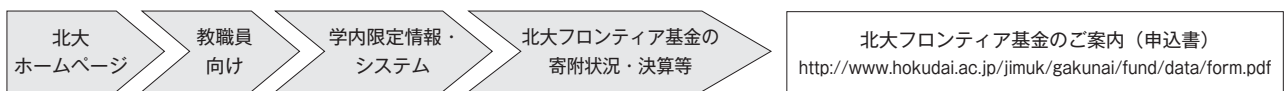


平野鉄也 様（平成26年12月25日）

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

「北海道地区FD・SD推進協議会」総会を開催

「北海道地区FD・SD推進協議会」の第5回総会を12月10日（水）に学術交流会館において開催しました。

当協議会は、参加校である道内52の大学・高等専門学校が連携・協同して、FD、SD及びTAD*の推進に係る情報の交換・共有やプログラムの共同開発を目的として、平成21年10月に設立され、本学が代表幹事校を務めています。

総会の第1部（午前の部）には、関係者約40名が出席し、新田孝彦理事・副学長の挨拶に続き、総会の議事が行われました。当協議会の設立以来、初めて、加盟校から会費を徴収すること

が提案され、審議の結果可決されました。今後の運営が充実・安定したものとなることが期待されます。

その後、細川敏幸高等教育推進機構教授による、「日本のFD 世界のFD」と題した講演が行われ、出席した関係者は熱心に聞き入っていました。講演後には、「諸外国における数週間に及ぶFDは通常業務に支障がないのか」、「非常勤講師に対するFDは実施しているのか」などの質問が挙がり、活発な質疑応答がなされました。

第2部（午後の部）には、26名が出席し、FDやSDに関する諸問題についてテーマ別セッションが行われました。

テーマ別セッションでは、FDやSDに関してそれぞれの大学の現状や抱えている課題について、3つのテーマ（「FD・SDの効果をいかに判定するか」、「学生の自習を促すFD」、「職域別SDについて」）に分かれて事例等を報告し、討議が行われました。

*TAD

ティーチング・アシスタント（TA）の教育能力向上のための組織的取り組み。

（学務部学務企画課）



講演を聞く参加者



テーマ別セッションの様子

「平成26年度冬山登山講習会」を開催

11月21日（金）午後6時30分から、高等教育推進機構1階N1講義室において、冬山登山講習会を開催しました。本講習会は、学務部が冬山登山の事故防止のために、毎年山系の公認学生団体と実施しているもので、今回は体育会山岳部（顧問：教育学研究院松本伊智朗教授）の協力のもと、樋口和生氏（大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立極地研究所 南極観測センター専門職員）を講師に招き、開催しました。

樋口氏は、南極地域観測隊越冬隊で南極観測における野外行動の危機管理全般、隊員向け安全教育等を担当され

るとともに、山岳ガイドや国内外での豊富な登山経験から、雪崩事故防止に関する知識の啓蒙と事故防止技術の普及に携わられています。講習会では、「冬山登山の危険と対策」と題し、雪崩に遭わないための対策と万が一の場合の対処方法等について、具体的な事例を交えてお話いただきました。

参加した69名の学生・教職員・一般市民からは、講演中、雪崩について熱心な質疑があり、参加者は安全な冬山登山について、決意を新たにしています。

（学務部学生支援課）



講演を行う樋口氏



会場の様子

「知的財産セミナー」を札幌キャンパス及び函館キャンパスで開催

産学連携本部は、平成26年度の知的財産セミナー「研究活動を実りあるものにするための産学連携基礎講座」を、11月19日（水）・20日（木）に札幌キャンパス、12月5日（金）に函館キャンパスで開催しました。

今回の知的財産セミナーでは、産学連携本部講師による「知的財産の基礎知識」「安全保障輸出管理や成果有体物管理の基礎」「民間企業との共同研究のコツ」「共同研究契約・受託研究契約の留意点」「選考委員の目線で見えた通る申請書」といった研究者に必須の内容から、独立行政法人科学技術振興機構（JST）及びNPO法人グリーンテクノバンクからの招聘講師による「JSTの産学連携に係る公募事業の概要」「農林水産省の競争的研究資金事

業の概要」といった研究者に役立つ外部情報まで、幅広く取り上げました。

産学連携本部では知的財産セミナーを毎年学内向けに開催していますが、今年度は昨年度までの経験を踏まえて、「すべての講義を他大学をはじめとする外部聴講者の方にも公開する」「函館キャンパスをネット中継ではなく質疑応答もできるようリアル講義とする」という2点を変更して実施しました。これは、「産学連携に関する知識は本学だけでなく学外機関にも知っていただくことが重要であること」「産学連携に関する知識は本学にとってますます重要かつ必須となっていくはずである」という思いから決めたものです。結果として、昨年度に比べて数倍の人数の方（札幌約50名、函館約

20名）にご参加いただき、アンケートの結果もすべての講義で80%以上の方から“大変参考になった”あるいは“参考になった”と回答いただきました。また、産学連携本部にとっても、研究者等が現場で抱えている疑問やご要望等を直接お伺いできる好機となりました。

社会貢献を求められる本学にとっては、知的財産をはじめとする産学連携の知識はすべての研究者が持つべき知識です。知的財産セミナーについては産学連携本部の使命として継続的に実施していきたいと考えていますので、これまで参加したことがない方も来年度はぜひご参加いただければと思います。

（産学連携本部）



札幌キャンパスの様子



函館キャンパスの様子

COI-T「食と健康の達人」拠点フォーラム／第5回COI-Tプログラム「『食と健康の達人』拠点」参画機関会議を開催

11月30日（日）東お茶の水ビル（東京都千代田区）において、第5回COI-Tプログラム「『食と健康の達人』拠点」参画機関会議とCOI-T「食と健康の達人」拠点フォーラムを同時開催しました。

COI-T「食と健康の達人」拠点では、プレママから、子育て、高齢者の健康を守り、病後も美味しい食と楽しい運動で“笑顔のあふれる社会”の実現を目指し、①健康度のわかる「健康ものさし」と「セルフヘルスケア」、②個人の健康状態に最適な「美味しい食・楽しい運動」、③地域における「健康コミュニティ」の構築、以上3つの研究開発を進めています。

本フォーラムは、そのビジョンと具体的な取り組みを広く皆様に知ってい

ただき、実際に体験していただくことを目的に開催しました。

当日は、川端和重理事・副学長による開会の挨拶、COIビジョナリーリーダーの松田 譲氏（公益財団法人加藤記念バイオサイエンス振興財団理事長／協和発酵キリン株式会社相談役）による基調講演「健康長寿におけるヘルスケアと新ビジネス」に続き、「食と健康の達人」拠点の取り組みの説明及び研究成果の報告を行いました。また、ポスター展示や実際にプロジェクトの活動を体験できる展示スペースを併設し、活発な意見交換の場となりました。

多くの参画企業・参画機関・参画検討企業等からご参加いただき、100名以上の来場数となり盛況のうちに幕を

閉じました。

終わりに、本フォーラム・本会議開催に当たり、ご配慮・ご協力いただきました皆様に改めてお礼申し上げます。

◆問い合わせ先

産学連携本部

Tel：011-706-9561 Fax：011-706-9550

E-mail：jigy@mcip.hokudai.ac.jp

※COI（Center of Innovation）プログラム

ハイリスクではあるが実用化の期待が大きい異分野融合・連携型の基盤的テーマに対し、産学が連携して研究開発を進めています。

（フード&メディカルイノベーション推進本部）



会場の様子



川端理事・副学長の開会挨拶



松田氏による基調講演



展示場の様子

鮮度保持技術シンポジウムを開催

12月2日（火）フロンティア応用科学研究棟「鈴木章ホール」において、本学と独立行政法人北海道立総合研究機構が協働して「鮮度保持技術シンポジウム」（本学窓口：産学連携本部）を開催しました。

はじめに、農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課長の島田和彦氏より「農林水産・食品産業の振興に向けた研究開発の取組みについて」と題し、農林水産省における取組みや指針についてお話しいただきました。また、一般社団法人北海道食産業総合振興機構研究開発部統括部長の鍋島芳弘氏より「食産業振興に向けたフード特区機構の取組みについて」と題し、北海道の食産業活性化への取組みをご紹介いただきました。後半の研究紹介では、独立行政法人北海道立総合研究機構の木村 稔加工利用部長、長尾明宣研究部長、柿本雅史食品開発部長より、鮮度保持に関わる技術の取組み事例をご紹介いただきました。また、本学からは水産科学研究院の今野久仁彦教授より「これからの北海道の水産業

と鮮度維持による海外展開」、農学研究院の川村周三教授より「道産農畜産物の鮮度・品質の保持向上技術の現状と課題（米、ジャガイモ、にんじん、牛乳）」、工学研究院の近久武美教授より「食産業におけるエネルギーマネジメント」と題して、それぞれ発表がありました。総合討論では産学連携本部の木曾良信特任教授がコーディネーターとなり発表者を交えた意見交換を行ったところ、会場からも意見や質問が活発に出されました。

当日は企業や大学関係者、研究機関、官公庁関係者など191名の方にご参加いただき、盛況のうちに終了しました。

本シンポジウムの事務局は産学連携本部が担い、今後も継続して開催しますので、興味のある研究者の方はぜひご参加ください。ご不明な点やご質問などありましたら、お気軽にお問い合わせください。

◆ jigyo@mcip.hokudai.ac.jp

（産学連携本部）



川端和重本部長の開会挨拶



農林水産省 島田課長の講演



シンポジウム会場



総合討論



会場からの質問



北海道立総合研究機構 遠藤 滋理事の開会挨拶

人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 第24回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、12月9日（火）に学术交流会館にて第24回「赤い糸会&緑の会」を開催しました。

本会は企業と若手研究者（DC、PD）との直接情報交換会であり、企業には若手研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業の研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は通算24回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、総合化学院、理学院、生命科学院、工学院、環境科学院、医学研究科、水産科学院、薬学研究院から33名（DC：31名、PD：2名）の若手研究者が参加しました。また企業からも、化学、金属、食品、製薬、繊維、機械、電気、建設、精密機器等の各種業界から16社

（24名）にご参加いただきました。

本会では、冒頭の人材育成本部長の望月恒子教授による開会挨拶、赤い糸会担当の樋口直樹特任教授による趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行われました。

さらに、この「赤い糸会&緑の会」を通じて企業に就職した若手研究者の先輩方3名が今回の企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれました。

開催後の企業側のコメントからも、「年々レベルが上昇している」「運営が洗練されている」との声をいただくことができました。また参加した若手研究者からは、「多くの企業と接点を持つことができ、大変有意義であった」「インターンシップへ繋がりそうだ」といった嬉しい声も聞かれました。

次回2月18日（水）の第25回「赤い糸会&緑の会」にも、すでに定足の16社のエントリーが確定しており、オブザーバ2社を加えると18社の参加となります。

終わりに、人材育成本部では以上の活動に加えて、企業研究所視察、Advanced COSA、J-window、キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、また企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に若手研究者の実践力を高めることへ注力していきますので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



望月人材育成本部長の開会挨拶



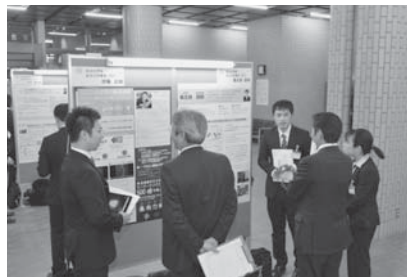
樋口人材育成本部特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る若手研究者



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

■ 部局ニュース

教育学研究院が西興部村と連携協定を締結



協定書を取り交わす小内研究院長と高畑西興部村長（右）

教育学研究院はオホーツク管内西興部村との間で連携協定を締結し、12月22日（月）に西興部村役場庁舎で小内透教育学研究院長と高畑秀美村長が出席して調印式を行いました。

教育学研究院は、平成22年度から平成27年度までの中期計画において、社会との連携を通じて、研究成果を積極的に社会に還元するとともに、研究院

の研究活動を国際的に広く発信することを目標に、地方自治体等と連携し、教育課題の解決を充実させることを目指して活動をしてきました。道内の自治体との連携協定は喜茂別町に続き、この度の西興部村が2番目となり、「学校教育及び生涯学習」や「地域の福祉」等について相互に協力していくことが合意されました。

西興部村と本学との連携は、平成19年から高等教育推進機構・生涯学習計画研究部門がインターネットを利用して、公開講座を本学会場と西興部村公民館を結んで実施したことを契機としています。一昨年には、若手酪農家や中学生など同村の未来の担い手を対象にした面接調査を実施、昨夏は教育学部生が西興部村中学校を訪問し、中学生の学習支援を行う交流を行っています。

西興部村は我が国の農村地域に共通する過疎と高齢化に直面しながらも福祉と教育を大切にしたい村づくりをすすめる、「平成の大合併」に際しても、合併をせずに地域の発展を図る選択をし、「小さくても輝く村づくり」を進めてきました。教育学研究院は、そうした取組みから学び、北海道の地域の人々の生活に根ざした研究と教育を発展させていきたいと考えています。

（教育学院・教育学研究院・教育学部）

薬学研究院・薬学部が台湾 台北医学大学と部局間交流協定を締結

11月27日（木）、薬学研究院・薬学部は、台湾の台北医学大学薬学部との学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書の調印を行いました。

台北医学大学で執り行われた調印式には、台北医学大学から呉 介信薬学

部長ほか12名が出席し、本学からは南雅文薬学研究院長ほか3名が出席しました。

本学では、医学研究科・医学部及び保健科学研究院・保健科学院がすでに交流を進めているところですが、本協

定により、更なる教育・研究の交流が期待されます。

（薬学研究院・薬学部）



協定書を取り交わす南雅研究院長（左）と呉学部長（右）



調印式後の記念写真

第2回リーディングプログラム国際シンポジウム “Ambition Across the Disciplines” を開催



フロンティア応用科学研究棟「鈴木章ホール」での記念撮影

物質科学フロンティアを開拓するAmbitiousリーダー育成プログラム(ALP)*では、新時代を先導する研究者を育てるべく2回目の国際シンポジウムを12月11日(木)・12日(金)に開催しました。これはコンベンショナルなシンポジウムのほか、リーディング生が主体となって英語だけで運営するポスターセッションとワークショップも併催し、多様なシーンでの言語運用能力の向上と圧倒的専門力の英語化を目指しました。

海外から参加の大学院生15名を含む140名余が参加した初日のシンポジウムは、山口佳三総長の冒頭挨拶から英語でスタートしました。“Ambition Across the Disciplines (大志は専門分野を超えて)”というテーマに基づいて、フランス・ストラスブール大学のElena R. Savinova教授、国立台湾大学のWen-Chang Chen教授、Jye-Shane Yang教授、シンガポール国立大学のJun Li教授らが、学術分野を超えた視野で世界の最新研究を紹介し、理想とするリーダー像をリーディング生に伝えました。それに応じる形で本学から

は黒田紘敏特任准教授(ALP)、越崎直人教授(工学研究院)、中島 祐助教(先端生命科学研究院)、梅澤大樹准教授(地球環境科学研究院)が数理連携と物質科学の研究成果を論じました。ディスカッションでは学院の枠を超えた5つの専攻が参加する本プログラムならではの多様な切り口での議論が展開され、リーディング生からの問いに講演者が窮する場面も見られました。

夕方からは定山溪温泉に移動し、ポスターセッションとワークショップを開催しました。リーディング生と海外から参加した大学院生の交流の場も兼ねたポスターセッションは、参加者全員での会場設営から和気あいあいとした雰囲気にもまれ、予定を大幅に過ぎて真夜中まで続きました。翌日は朝から、英語でディスカッションするPBL(課題解決型学習)型ワークショップを開き、映画「ミクロの決死圏」を題材にALP教員のファシリテーションで科学技術の社会への適用のあり方について多様な議論を戦わせました。最後は藤吉隆雄特任准教授(ALP)による“ミクロの決死圏の原案は鉄腕アトム

だった”とのミニレクチャーを実施し、互いの文化の影響やグローバルな権利ビジネスの問題を考える契機となりました。

これらの取り組みは、専門力の深化にとどまらず、科学技術倫理、文化の多様性への理解など、物質科学のグローバルリーダーたる素養を獲得するために役立つことと思います。このシンポジウムの実現に向けて教員陣はファシリテーション研修に取り組むなどし、周到な準備を目指しました。新たな発想による効果的な大学院教育プログラムの開発を、本プログラムではこれからも進めていきます。

*物質科学フロンティアを開拓するAmbitiousリーダー育成プログラム(ALP)

総合化学院総合化学専攻、生命科学院生命科学専攻、環境科学院環境物質科学専攻、理学院数学専攻、工学院量子理工学専攻に所属する大学院生を対象とする5年一貫の大学院教育プログラム。

(理学院・理学研究院・理学部)



ポスターセッションの様子



ワークショップの様子

第15回RIES-Hokudai国際シンポジウム「響」を開催



集合写真



ポスターセッションの様子

12月16日（火）・17日（水）、シャトレゼ ガトーキングダム サッポロにおいて、第15回RIES-Hokudai国際シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、電子科学研究所が中心となって毎年開催し、その年毎に漢字1文字でテーマを設定しています。今年度は、「振動（oscillation）」、「共鳴（resonance）」、「調和（harmonization）」、「協調（connections）」、といった意味を持つ「響」という漢字をテーマに選びました。本学をはじめ、国内では東北大学、東京工業大学、大阪大学、九州大学、筑波大学、沖縄技術大学院大学から、海外ではローレンス・バークレー国立研究所（アメリカ）、精華大学（中国）、国立陽明大学（台湾）、及び企業からの総勢130人を超える大学院生、ポスドク、研究者などの参加者が集いました。本学は、電子科学研究所のほか、理学研究院、先端生命科学研究院、情報科学研究科、工学研究院から参加がありました。

このシンポジウムでは、5セッションで国内外の14名の招待講演者と、1名の基調講演者が「響」という漢字をテーマに講演を行いました。各セッションのテーマは、「生物機能における協同性」、「機能性物質における調

和現象」、「スマート材料の集団相運動の振動界面」、「フォトニクスと光科学における振動と共鳴」でした。さらに、今年度は「新しい共同研究を目指して」というセッションを新設し、電子科学研究所が主催する「北海道大学ニコイメージングセンター」及び「ナノテクプラットホーム事業」に関する講演を行いました。また、東京工業大学応用セラミック研究所の細野秀雄教授が基調講演を行い、「響」にちなみ、新規機能物質の創成において、基礎から応用を見据えた学際的研究の重要性を、とてもわかりやすく発表いただきました。

電子科学研究所で研究する大学院生の参加者に加え、他部局の大学院生の参加を募った結果、9名の参加がありました。ポスターセッションでは、昨年度に引き続き、素晴らしいポスター発表を行った若手研究者を表彰するポスター賞を授与しました。ポスター発表の時間以外にも、懇親会及び懇親会後の時間を利用して、招待講演者の先生方と、自身のポスターの前で熱心に研究の紹介をする大学院生の姿がとても印象的でした。今回のポスター賞の特徴は、年長の研究者の投票によって受賞者が決定するところにあり、受賞

者が関連する分野の科学者や専門家との連携を持ち、自身の科学者としての新分野の共同創造につながる機会が持てるようになっています。

2日間のシンポジウムを通じて、学際的な議論の促進や、将来の共同研究につながる新たな「ネットワーク」が構築できました。電子科学研究所以外の学内参加者を含む大学院生、ポスター賞受賞者の多くから、「様々な研究者や学生から直接指摘等をいただくことができ、研究活動を続けていく上でとても参考になった」とコメントがありました。

このシンポジウムは、電子科学研究所が、ファイブスター・アソシエーション（北海道大学電子科学研究所、東北大学多元物質科学研究所、東京工業大学資源化学研究所、大阪大学産業科学研究所、九州大学先端物質化学研究所）、及びナノマクロ物質・デバイス・システム創製アライアンス、物質・デバイス領域共同研究拠点との共催により、開催したものです。ここにご協力いただきました関係機関各位に心より感謝いたします。

（電子科学研究所）

スラブ・ユーラシア研究センターが冬期国際シンポジウム 「境界：ユーラシアで交差する動力」を開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、12月4日（木）・5日（金）の2日間、恒例となっている半期に一度の国際シンポジウムを開催しました。今回は、センターに事務局が置かれている境界研究ユニット（UBRJ）が中核となり、「境界：ユーラシアで交差する動力」というテーマの下で6つのセッションを組織しました。国外からは、アメリカ、中国、ロシア、韓国、ノルウェー、ポーランド、インド、ハンガリーから研究者を招待しました。2日間で89名（延べ133名）もの多数の方にご来場いただきました。4日（木）には札幌アспенホテルでレセプションが、6日（土）には小樽・余市方面でのエクスカージョンが行わ

れ、センター関係者と参加者との親睦が図られました。

「ボーダースタディーズにおける実践的意義」と題するセルゲイ・ゴルノフ（スラブ・ユーラシア研究センター外国人研究員）による基調報告を皮切りに、初日には国境観光、災害と移住者、2日目には北極圏、ロシアをめぐる国際関係、戦間期ソ連外交をテーマとしたセッションが組織されました。また、初日のセッションでは地域研究における境界の問題についてパネルディスカッションも行われました。今般のシンポジウムは、多様なテーマでのセッションを組むことで、我が国そして世界における境界研究の現段階を知る上で、格好の場となりました。

同時に、今回のシンポジウムでは、（政治）地理学的な境界研究「理論」と個々のフィールドでの問題解決の「実践」の問題とをいかに架橋するのかがという問題関心が強く現れ、我が国での境界研究の新たな一歩を示すことができました。加えて、「理論」「実践」双方の基礎となる質の高い境界地域・越境現象の「記述・分析」そして「比較」、これらの要素を組み合わせながら我が国の境界研究を発展させていくという、一つの方向性が示されました。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



「境界（ボーダース）が変えるロシアの国際関係」の様子



「北極海航路の社会・経済的インパクト」で報告する
ウラジーミル・セミョーノフ氏（中央海洋船舶設計研究所、ロシア）

北方生物圏フィールド科学センターで水圏ステーション 七飯淡水実験所竣工記念式典・祝賀会を挙

北方生物圏フィールド科学センターでは、水圏ステーション七飯淡水実験所の竣工を祝い、12月5日（金）に竣工記念式典・祝賀会を行いました。

式典・祝賀会は、新実験所の施設見学の後、函館国際ホテルにおいて開催しました。本村泰三センター長の式辞に続き、山口佳三総長、安井 肇水産科学研究院長、原 彰彦名誉教授（七飯淡水実験所第3代目所長）から祝辞があり、佐伯 浩一般社団法人寒地港湾技術研究センター代表理事会長（前総長）による祝杯の後、懇談に入りました。

祝賀会では、山羽悦郎七飯淡水実験所長より、「七飯淡水実験所の過去、現在、そして未来」と題して同実験所の紹介が行われ、盛会のうちに閉会となりました。

七飯淡水実験所は、昭和15年に、函館高等水産学校の養殖場として用地買収されたことに始まります。昭和24年に本学水産学部が設置された後、昭和34年に養魚実習施設が新築され、昭和41年に研究施設「七飯養魚実習施設」として定員が配置されました。その後、水産学部に附属する養殖施設とし

て教育・研究に貢献し、平成13年には、北方生物圏フィールド科学センターに統合されました。

新しく竣工した施設では、これまでの学部・大学院教育、七飯町や函館市等の道南地域での社会教育に加え、本学全体としての教育・研究に貢献し、地元の皆様に愛される施設として地域とともに発展していくことが期待されています。

（北方生物圏フィールド科学センター）



新七飯淡水実験所の外観



屋内飼育室



山羽教授によるサクラマス稚魚飼育の説明



式辞を述べる本村センター長



祝辞を述べる山口総長

北方生物圏フィールド科学センターで水圏ステーション 七飯淡水実験所の一般公開を実施

北方生物圏フィールド科学センターでは、水圏ステーション七飯淡水実験所の新棟完成に伴い、12月6日（土）に同実験所内において、七飯町内の近隣住民を対象とした一般公開を実施しました。

同実験所は、大学における教育や研究のほか、小中学生へのサケマス教室や高校生への実習を行ってきました。しかしながら、施設が老朽化している

上、大きな実習室がなく悪天候時の対応ができなかったため、これまで一般公開は行っていませんでした。

当日はあいにくの吹雪模様でしたが、朝早くから、幼児や年配者も含め多くの見学者が訪れました。まず、新しく作られた実習室の中で、山羽悦郎所長により同実験所の歴史、教育研究を中心とした説明が行われ、後半は同実験所内の飼育室の見学となりまし

た。新しく作られた飼育室や高密度飼育水槽の構造、そして飼育されているサケマスやチョウザメの飼育方法等の説明が行われました。説明会は2回行われ、参加者は、水槽に入っている無数の稚魚に関心を寄せていました。

（北方生物圏フィールド科学センター）



説明に熱心に聞き入る参加者



飼育室の稚魚について説明を受ける参加者



飼育室の水槽で泳ぐチョウザメ

鈴木 章名誉教授と小学生親子の実験交流イベント 「サイエンスパーク in 北海道大学」を開催

総合博物館では、12月6日（土）に、鈴木 章名誉教授をお迎えして、子ども達に科学への関心を深めてもらうイベント「サイエンスパーク in 北海道大学」（主催：北海道、北海道大学総合博物館）を、鈴木章ホールのあるフロンティア応用科学研究棟1階のセミナー室で開催しました。札幌市と旭川市の小学校5・6年生と保護者30組が参加しました。

最初に、主催者を代表して川端和重理事・副学長から実験における失敗から学ぶ重要性について触れる挨拶があった後、鈴木名誉教授から科学への関心を広げるこのイベントを楽しんでほしいとお言葉をいただきました。

その後、山本靖典工学研究院准教授の指導のもと、参加児童は、隣に座った保護者が見守るなか、各自でクロスカップリングの実験を行いました。鈴木名誉教授や川端理事・副学長、山本

准教授、津曲敏郎総合博物館長がそれぞれの席を回り、鈴木名誉教授は試薬の攪拌方法などをアドバイスされました。司会進行を務めたミュージアムマイスターの久保田彩さん（理学院修士1年）と山内彩加林さん（水産学部2年）も児童に声をかけ、実験を手伝いました。

鈴木名誉教授への質問タイムでは、ノーベル賞を受賞した時の気持ちや、研究で失敗した時の挫折からの克服方法などについて、児童達から率直な思いや疑問が寄せられました。鈴木名誉教授は、「ノーベル賞をいただいたことは嬉しいが、研究で自分が疑問に思ったことがわかったことの方が嬉しかった」、「研究を続ける上で、失敗や挫折を恐れてはいけない」など優しく応えてくださいました。

実験の後、鈴木名誉教授は、資源の乏しい日本が世界に貢献するためにも

理科や化学は重要であると語られました。化学も経済も工学も文学も大事であり、その中からサイエンスにも興味を持ってほしい、今日の参加者からサイエンスの道に進む人が出てほしいと語られました。

鈴木名誉教授と川端理事・副学長、山本准教授、津曲館長を囲んで児童たちは記念撮影をし、最後に鈴木名誉教授から児童一人ひとりに修了証書が手渡されました。

津曲館長からの閉会の挨拶後、司会を務めたミュージアムマイスターの久保田さんと山内さんは、参加児童と保護者の方々を対象に、フロンティア応用科学研究棟2階と総合博物館1階のノーベル賞受賞記念展の解説を行いました。

（総合博物館）



小学生にアドバイスする鈴木名誉教授とミュージアムマイスター2名



鈴木名誉教授が参加児童一人ひとりに修了証書を授与



総合博物館でのノーベル賞記念展示を解説するミュージアムマイスター

平成26年度メディア・コミュニケーション研究院公開講座 「企業とそのイメージを考える」が終了



北洋大通センター・セミナーホールでの公開講座の様子

メディア・コミュニケーション研究院では、11月6日（木）から12月11日（木）の1ヵ月半にわたり、「企業とそのイメージを考える」と題した全6回の公開講座を実施しました。本公開講座は一般の公開講座とは異なり、北海道CSR研究会、札幌商工会議所との連携により、広報・CSR（企業の社会的責任）に興味を有している実務者・

事業者の皆様を対象に行いました。場所も学内だけではなく、札幌商工会議所と株式会社北洋銀行の協力により、市内中心部でも行いました。

一般の公開講座と最も異なっていたのは講義内容です。旧来の公開講座が一般者向けの導入的内容であったのとは異なり、本講座では実務家を意識した実践的な内容やケースを豊富に導入

し、参加者からも大きな評価を得ました。実践的な社会問題の解決を標榜している本研究院国際広報論分野に相応しい公開講座の姿として、今後のモデルケースのひとつとなることが期待されています。

（国際広報メディア・観光学院、
メディア・コミュニケーション研究院）

国際広報メディア・観光学院がサハリン国立大学で 留学説明会を実施

11月24日（月・祝）・25日（火）に、本学の大学間交流協定大学でもあるサハリン国立大学（ユジノサハリンスク）を訪問し、留学説明会を実施しました。本学院は例年北京において留学説明会を実施していますが、ロシアでの説明会は今回が初めての試みでした。

24日（月・祝）はIgor G. Minervin学長を表敬訪問し、国際交流課責任者のVictor I. Korsunov教授、東洋学・観光サービス学部日本語学科のOlga Shashkina教授を交え、学生交流等について意見交換を行いました。その

後、東洋学・観光サービス学部を場所を移し、Ruslan V. Yakimenko学部長、Elenfa V. Kazantsevaサハリン国立大学教員養成学校長らと、学生交流・留学や今後の研究交流について意見交換を行いました。東洋学・観光サービス学部は当学院と研究領域が重なる部分も多く、学生の留学に対する関心も高いように感じられました。当学院教員による留学準備のためのセミナー等をサハリン国立大学にて数週間程度開催できないかといった要望も挙がりました。

25日（火）は東洋学・観光サービス学部の学生（大学1～5年生、100名

程度）に対し留学説明会を実施し、本学院・各専攻の紹介、留学手続きの手順を中心に、説明及び質疑応答を行いました。特に、ロシア人学生にとっては留学費用が大きな問題であることから、国費留学の制度についても詳しく説明をしました。

今後も日本人学生・留学生の多様化を試みつつ、本学院の研究・教育体制の更なる充実を図っていきたいと思います。

（国際広報メディア・観光学院、
メディア・コミュニケーション研究院）



留学説明会の様子

経済学部で北海道財務局長の特別講演会を開催

経済学部では、北海道財務局長の渡辺健雄氏による特別講演会を12月9日（火）午前10時30分より文系共同講義棟（軍艦講堂）2番教室において開催しました。特別講演会のタイトルは「財政・金融・国有財産の現状と課題～地域と財務省・金融庁をつなぐ北海道財務局～」で、北海道経済の現状分析などを題材としながら財務局の仕事内容についてご講演いただき、学生及び一般の参加者、約100名が熱心に耳を傾けました。

講演者である渡辺氏は、東北大学を卒業後、昭和57年に大蔵省に入省され、平成4年にJETROロサンゼルス・

センター、平成9年関東財務局理財部金融第2課長、平成15年同金融監督官、平成25年造幣局総務部長を歴任され、平成26年7月から北海道財務局長とされています。

講演では、財務局（財務省・金融庁）の業務を経済調査、財政、金融、国有財産の4つの面から具体的なデータや資料を用いてわかりやすく説明されました。特に経済調査については、北海道での調査結果を示しながら解説されたため理解が大いに深まりました。その他の事項についても、我が国の現状を示す生きたデータに基づく臨場感と説得力のあるお話を聞くことが

できました。

最後に北海道経済の現状と課題についての説明がありましたが、データが示す必ずしも楽観視できない状況に対して、学生一人ひとりが北海道の将来について真剣に考える良い機会になったようです。

このような講演会が、学生にとって現実の経済問題に興味を持ち、真剣に社会の在り方を考える良い機会になることを期待します。

（経済学研究科・経済学部）



北海道財務局長 渡辺氏



熱心に耳を傾ける聴衆

「おしよろ丸関係者向け内覧会」を横浜港で実施

水産学部附属練習船おしよろ丸V世の「関係者向け内覧会」を、12月7日（日）12時30分から15時30分の間で横浜港大さん橋国際旅客ターミナルにて実施しました。

当日は天候にも恵まれ、横浜港に

は、おしよろ丸が新しい船となってから初めての寄港とあって、樋口達夫北水同窓会東京支部長（大塚ホールディングス株式会社代表取締役社長兼CEO）をはじめ、518名もの見学者が訪れました。

見学者には家族連れも多く、船員からの説明を熱心に聞いたり写真を撮影したりする様子が各所で見られました。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



横浜港へ初めて寄港するおしよろ丸V世



見学者で賑わう岸壁



見学者にブリッジで説明する航海士

農学研究院で平成26年度第3回FD研修会を開催

農学研究院では、平成26年度第3回FD研修会「ゲートキーパー研修会」を、12月18日（木）午後4時から6時まで、農学研究院総合研究棟多目的室W109にて開催しました。受講生として14名（教授：3名、准教授4名、講師6名、助教1名）が参加しました。

「ゲートキーパー」という言葉は日常的には聞き慣れない言葉ですが、精神的な問題を抱えている人がいる時、より専門的な部門の受診が必要かどうかを判断する役割を担う人を指します。心の問題を抱える学生が多いという本学の状況を考慮すると、教員が知っておくべきことであるため、保健センターの教員、カウンセラー合わせて5名の方々に指導いただきました。

当日はまず保健センターの藤井 泰先生から「うつ病と自殺」というテ-

マで1時間講演があり、うつ病の概要やゲートキーパーの役割、心の問題を抱える人がいるときの対応、またこの問題についての本学での対応について紹介がありました。その後、カウンセラー4名（齊藤美香氏、齋藤暢一郎氏、武田弘子氏、川島るい氏）の指導の下、仕事上の悩みを抱えた夫とその妻との会話のビデオを視聴後、2名1組となり、実際にビデオのとおり演技してみるというロールプレイを行いました。このビデオでは、メンタル問題を抱えた夫に対し、適切な対応をとれる妻と、そうではない妻の2通りの対応が上映され、実際に演技してみることで、対応の適切さ、不適切さを実感してみるということで進められました。

藤井先生からは、メンタルヘルスのファーストエイドとして、1. リスク

評価、2. 判断・批評せず話を聞く、3. 安心・情報を与える、4. サポートを得るよう勧める、5. セルフヘルプが重要との講演がありました。ロールプレイにより、これらが実際に重要であり、特に判断・批評しないこと、対象者に自発的に会話させることの重要性を、参加者全員が感じ取ることができたように思います。心の問題を抱えた学生への対応は難しいですが、この研修内容を今後に生かすことができればと強く感じました。

今回お世話になりました保健センターの皆様へ、ここに改めて感謝申し上げます。

（農学院・農学研究院・農学部）



研修会受講の様子



講演する藤井先生

第12回脳科学研究教育センターシンポジウム 「認知のダイナミクス～認知システムの動態を探る～」を開催



講演者と基幹教員

12月5日（金）に、第12回脳科学研究教育センターシンポジウム「認知のダイナミクス～認知システムの動態を探る～」(世話人代表：文学研究科特任教授 菱谷晋介)を医学部学友会館フラテホールで開催しました。脳科学研究教育センターには医学、薬学、理学、工学、保健科学、文学、教育学など学内15部局の約30名が基幹教員として参加しており、脳科学研究の推進と、大学院講義、実習、合宿研修などを柱とした教育活動を行っています。また、毎年、学内外の脳科学研究者が参加するシンポジウムを開催しています。

今回のシンポジウムは、高次脳機能の可塑性についての理解を深めるべく、認知研究の中心的テーマの一つである認知の柔軟性をテーマにして、その神経基盤に関する基礎研究から、医療や社会における応用研究に至るまでの、幅広い分野での研究について講演が行われました。

吉岡充弘センター長（文学研究科）による挨拶とセンターの紹介に続き、安田和則理事・副学長からの挨拶後、セッションを開始しました。セッション1「認知スキルの熟達・個人差」では、川端康弘教授（文学研究科）から認知スキルの熟達によって色彩認知が変動する可能性について、箱田裕司教授（京都女子大学発達教育学部）から

は安定した個人の認知的特性と考えられていた認知スタイルが、より可塑的な認知のモードという観点から把握可能であることについて、それぞれ最新の研究成果が紹介されました。セッション2「状況による認知の変動」では、仲真紀子教授（文学研究科）が司法面接場面における子どもの証言に関する研究について、池田文人准教授（高等教育推進機構／理学研究院）が思い込みとその解消に伴う認知の変化に関して、コンピュータによる支援システムやその利用も交えた研究について講演しました。セッション3「発達に伴う認知システムの変化」では、友田明美教授（福井大学子どものこころの発達研究センター）から、児童期の虐待が引き起こす脳構造の変化に関する研究成果と被虐待児への対応が紹介され、乾 敏郎教授（京都大学大学院情報学研究科）からは、高次認知機構とその発達に関する脳科学的研究の最新の成果と知見が紹介されました。最後に、渡辺雅彦副センター長（医学研究科）の挨拶があり活況のうちに閉会となりました。

学内の各部局や道内外の他大学などの研究者・学生等、195名の参加があり、多部局からなる脳科学研究教育センターの特色を活かした、幅広い分野の研究や応用への広がりを実感できる



討論の様子



講演する箱田教授



講演する友田教授



講演する乾教授

「認知のダイナミクス」というテーマの下で、活発な質疑応答がなされました。今回のシンポジウムが参加者の皆様の興味を満たすとともに、学内外の研究の新しい展開につながっていくことを願っています。

◆脳科学研究教育センターホームページ
<http://www.hokudai.ac.jp/recbs/>

(脳科学研究教育センター)

低温科学研究所技術部で第20回技術報告会を開催

12月12日（金）、低温科学研究所講義室において低温科学研究所技術部・技術支援本部共催による第20回技術報告会を開催しました。報告会では、11件（うち2件は要旨のみ）の低温科学研究所技術部が関わった研究発表や技術報告が行われました。例年同様、専

門領域を超えて、多様な分野の研究に触れる貴重な場となり、延べ30名を超える所内の研究者・学生・技術職員が参加し、活発な意見が交わされました。

また、本報告会の内容をまとめた「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第20号」を発行しました。詳し

い内容は本研究所技術部ウェブサイトでも閲覧できます。

◆ <http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



渡部直樹技術部長の挨拶



技術報告会の様子

北図書館で「英語多読」関連企画を開催

北図書館では、所蔵する英語多読図書を活用した「めざせ100万語！英語多読マラソン」という企画を行っています。

「英語多読」とは、英語学習法のひとつで「やさしい英語の本からたくさん読む」ことを特徴としています。「辞書はひかない」「わからないところはとばす」「つまらない本はやめる」という原則（多読三原則）のもと、多くの本（語数）を読んでいくことで、英語に親しみ楽しみながら、英語力をつけていくことができます。

図書館では現在約5,500冊の英語多読図書（北図書館約4,800冊、本館約700冊）を所蔵しています。「英語多読マラソン」では、参加者は読んだ語数を記録し100万語を目指していきます。対象となる図書には語数を表示したシールが貼ってあり、読み終わったらその数を集計していきます。100万語までの道のりは長いため、途中10万語ごとに達成証をお渡ししています。集計用の専用用紙も用意しています。

この「英語多読マラソン」は昨年度から行っており、現在累計で280名近い参加があります。すでに100万語に到達した方も3名いますが、今回、

「英語多読マラソン」の知名度向上と参加者を増やすために2つの企画を実施しました。

1つは、11月11日（火）から12月2日（火）まで行った「ランナーオススメPOP展」です。

これは、英語多読を実践している学生（「英語多読マラソン」参加者（多読マラソンランナー）や英語多読・多聴授業履修者）の方にイラスト入りなど趣向を凝らした推薦POPを作成してもらい、ナビゲーションとしてそれを多読図書とともに展示するというものです。POPを見て気に入ったものがあれば「イイネ！」シールを貼ってもらうという、図書を展示するだけではない参加型の企画です。100枚を超えるPOPが集まり、52枚のPOPに「イイネ！」シールが付けられました。

もう1つは、英語多読初心者向けに11月19日（水）に行った「英語多読マラソンスタートアップガイダンス」です。高見敏子准教授（メディア・コミュニケーション研究院）を司会に、多読マラソンランナーから、英語多読の継続のコツや効果などについて報告がありました。ガイダンス終了後、早速多読図書のコーナーに足を運んで教

員と本を選ぶ様子が見られるなど、参加者の関心の高さがうかがわれました。

両企画開催期間中に、新たに8名の「英語多読マラソン」への参加がありました。

「英語多読マラソン」は学生だけではなく、教職員の方も参加できます。

「多読」は英語を勉強しなければと思いつつなかなか始められない方にも、手軽にまた気楽に始めることができる学習法です。詳しくは「英語多読マラソンホームページ」をご覧ください。

◆英語多読マラソンホームページ

http://www.lib.hokudai.ac.jp/support/nitobe/tadoku_marathon/

または「多読マラソン」で検索

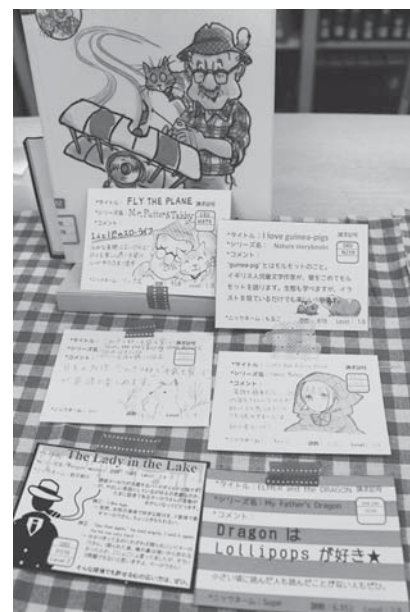
（附属図書館）



展示風景：写真手前と奥の棚の2箇所で開催



「スタートアップガイダンス」の様子



人気のあったPOP

附属図書館で「救命導入講習会」を開催

附属図書館では、12月16日（火）・17日（水）の2日間、札幌市北消防署幌北出張所の所員4名を講師に迎え、本館4階大会議室において図書館職員を対象にした救命導入講習会を開催しました。

16日（火）は29名、17日（水）は26名、合計55名の参加があり、講師よりAED（自動体外式除細動器）の使用方法の説明の後、人体モデルを使って

倒れている人への心臓マッサージやAED使用の実践訓練を行いました。

附属図書館は本館2階総合カウンター前と北図書館2階カウンター前にAEDを設置し、札幌市が実施している「さっぽろ救急サポーター事業」にも参画しています。

（附属図書館）



講師の消防署員による説明



実践訓練の様子

総合博物館夏季企画展示の巡回展とおしよろ丸V世船内ツアーを小笠原村で開催

12月14日（日），東京都小笠原村父島二見港で，総合博物館夏季企画展示の巡回展「北海道大学がやってきた学船 洋上のキャンパスおしよろ丸」を水産学部との共催，小笠原村，東京都小笠原支庁港湾課，京都大学宇宙総合学術研究ユニット，日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科，帝京科学大学アニマルサイエンス学科の協力により開催しました。また，併せて，おしよろ丸V世（平成26年7月竣工）船内ツアーを行いました。

二見港のある父島には，およそ2,000人が住んでおり，おしよろ丸が到着する3日前から防災無線を通じて巡回展示が開催されることが告知されました。また，おしよろ丸着岸後は，展示スタッフが街の中心にあるスーパーマーケットや飲食店へポスターの掲示を行いました。当日は，放送を聞いた親子連れや小学生のグループなど，2時間30分の開催時間中に約100名の来

場がありました。

巡回展示は「ガクセン」と名付けたテントへ，夏季企画展示で制作したおしよろ丸の歴史，教育，研究，仕事をテーマとした写真と解説をレイアウトしたパネルを2枚1組で掲示しました。当初，おしよろ丸のすぐ脇に設置することを検討しましたが，一般の方の立ち入りが制限されていることもあり，街の中心にある都道の脇での設営となりました。小笠原までの航海には日本大学と帝京科学大学の学生が60名ほど乗船しており，「ガクセン」内では彼らが展示スタッフとして活躍しました。また，平成25年の実習中に撮影された，イカが空を飛ぶ瞬間の写真が多くの来場者の目をひきました。選挙の日程と重なり，投票の行き帰りに立ち寄る方も多く見受けられました。

船内ツアーでは展示スタッフが，実際に教育研究が行われる現場を案内しましたが，おしよろ丸でどのような教

育がされ生活しているかを学生目線で語る，実体験をもとにした解説には説得力がありました。

荒天によりスケジュールを1日早め，巡回展示終了1時間後には二見港を後にしたため，船内ツアーの参加者は出港準備を行う乗組員の姿を間近で見ることができ，「北海道大学が船を持っていることを初めて知った」「毎年，おしよろ丸がこの時期に入港することは知っているが，何をしているのか展示を見て理解した」「船は，新築のにおいがした」，父島在住の本学水産学部OBは「おしよろ丸IV世よりも，V世はモニター類が大きくなるなど設備が充実した」などの感想を話してくれました。

巡回展示で使用したパネルは，今後もおしよろ丸に保管され，イベント時には展示されることになっています。

（総合博物館）



巡回展示「ガクセン」



展示解説を行う日本大学の学生



おしよろ丸V世船内ツアー

松本友関係資料を大学文書館で受贈

12月8日（月）、大学文書館では、山形県の鶴岡市郷土資料館を介して、松本晴子氏から祖父松本 友氏の旧蔵資料16箱の寄贈を受けました。

松本 友は、1891（明治24）年に山形県鶴岡に生まれました。山形県立荘内中学校を卒業後、1912（大正元）年に東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学農学部）の農業技術を学ぶコースである農学実科に入学、1915（大正4）年に卒業しました。1921（大正10）年に北海道帝国大学農学部附属農場の助手となり、札幌キャンパス内の第一農場で主に育種を担当しました。1940（昭和15）年からは富良野の第八農場駐在となり、戦後は第八農場を改組した富良野農場の管理を担当しました。その後、富良野農場を閉鎖することが決まり、1965（昭和40）年に本学

助手を辞して、山形県鶴岡に帰郷しました。

札幌キャンパス内にあった第一・第二農場が研究・教育のための大学直営農場と位置付けていたのに対し、第八・富良野農場は、小作人を入れて経営を行う小作農場でした。松本は、第八・富良野農場の現場で四半世紀にわたり、小作農場経営を監督しました。また、戦後の農地解放政策のために、大学も小作農場を順次整理することになると、松本は富良野農場の管理者として、農地の解放と整理、小作人の農地解放運動にも対処しました。

今回、ご寄贈いただいた資料の大きな内訳は、農場関係文書類7箱、書翰類3箱、日誌・原稿・ノート・メモ類2箱、新聞スクラップ類1箱、刊行物類3箱です。文書類は、本学の小作

農場の経営実情を示す貴重な資料です。また、日記・ノート・メモなどには、農場経営の状況や育種実験などについても詳細に記録されています。

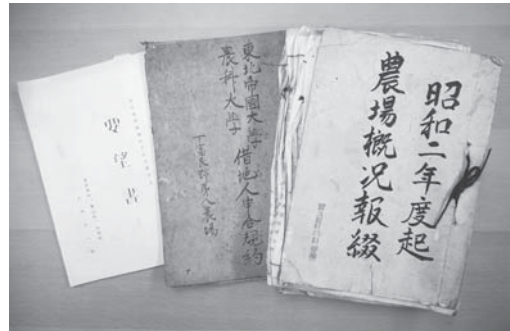
なお、松本 友は、本格的な北海道植民・開発事業を開始した1860年代末から1870年代半ばにかけて、開拓使官員として札幌・根室で北海道統治の責任者を務めた松本十郎（1839-1916年）の令孫にあたります。受贈した資料には、松本 友が執筆した十郎の伝記の原稿も含まれます。また、旧蔵資料の内、十郎に関するものは、郷里の鶴岡市郷土資料館が所蔵しています。

今後、大学文書館では受贈した「松本友関係資料」を、歴史的資料として利用できるよう、整理を進めていきます。

（大学文書館）



富良野派出所管内撮影（1943年11月3日）
前列中央が松本友



第一農場・第八農場関係文書

■お知らせ

北方資料閲覧室に新たに木製展示棚を配置

附属図書館北方資料閲覧室に12月25日（木），新たに木製展示棚を配置しました。

附属図書館では，平成25年度に公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団に，主に軸物と図類の貴重書を展示・公開するための備品を購入することを目的として補助金を申請し，助成を受けることができました。今回購入した展示棚はその助成金によるものです。

貴重な軸物・図類を，北方資料閲覧室で多くの来館者に閲覧していただくための木製展示棚で，ピクチャーレールなども備付された特注品となっています。

2月末までは「ヤエンコロアイヌ文書」を展示しています。「ヤエンコロアイヌ文書」は，カラフト西岸ナヨロのアイヌ物乙名の家に代々伝えられてきた清国の満州語文書2通（乾隆40年，嘉慶21年），漢文文書2通（嘉慶23年，不明）からなる卷子本2巻です。カラフト原住民の清国への朝貢関係を示す貴重な史料です。

今後も附属図書館にしかない絵巻物などの貴重資料を定期的に展示する予定です。

（附属図書館）



木製展示棚



展示風景

博士學位記授与

12月25日（木）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は32人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は3人でした。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部学務企画課)

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博 士 論 文 名
	氏 名		
博士（文学）	さい じょう れい な 西 條 玲 奈		反復可能な芸術作品の存在論とまばらなメテオロジー唯名論 主査：教授 山田 友幸
	チュエ 崔 チヤン 昌 鳳		スリングショットと事実 主査：教授 山田 友幸
博士（学術）	いの うえ たけ ひこ 井 上 岳 彦		仏教国としてのロシア帝国：二つのカルムイク人社会に関する考察 主査：教授 宇山 智彦
博士（文学）	コ 胡 キ 琪		『五国対照兵語字書』の研究 主査：教授 池田 証壽
	さくら い のり お 櫻 井 典 夫		ル・クレジオにおける小説世界 – 個人の危機から文明の危機へ 主査：教授 佐藤 淳二
博士（法学）	チン 陳 エイ 穎		中国における人民参審員制度改革の理念と現実 主査：教授 鈴木 賢
博士（医学）	かわ むら たい すけ 河 村 太 介		Sulfation patterns of exogenous chondroitin sulfate affect chondrogenic differentiation of ATDC5 cells (コンドロイチン硫酸の硫酸化構造が軟骨前駆細胞株ATDC5の分化に及ぼす影響) 主査：教授 生駒 一憲
	さ とう まさ のり 佐 藤 正 法		Anoikis Induction and Inhibition of Peritoneal Metastasis of Pancreatic Cancer Cells by a Nuclear Factor- κ B inhibitor, (-)-DHMEQ (NF- κ B阻害剤 (-)-DHMEQによる膵癌細胞のアノイクシ誘導及び腹膜転移阻害) 主査：教授 平野 聡
	あい つば まい ゆう ゆふ アイツバマイ ゆうゆふ		ハウスダスト中フタル酸エステル類曝露によるアレルギー症状への影響および住居特徴との関連 主査：教授 荒戸 照世
	おお たか かず と 大 高 和 人		肺癌症例のPET検査におけるSUV誤差の補正に関する研究 主査：教授 白土 博樹
	こん の よう すけ 金 野 陽 輔		Elucidating the role of microRNA-101 as a new therapeutic target for aggressive endometrial cancer (高悪性度子宮体癌における新たな治療標的候補としてのmicroRNA-101の機能に関する研究) 主査：教授 篠原 信雄
	しま だ しん ご 島 田 慎 吾		硫化水素は生存シグナルの増強とNrf2の核内移行を介して肝温虚血再灌流障害を軽減する 主査：教授 坂本 直哉
	なか がわ なお こ 中 川 直 子		小児呼吸器感染症の病態と治療法の検討：ヒトボカウイルス感染症とインフルエンザ 主査：教授 西村 正治
	にっ た たけ お 新 田 健 雄		肝外胆管癌におけるEpithelial Mesenchymal Transitionの臨床病理学的検討 主査：准教授 神山 俊哉
	む とう じゅん 武 藤 潤		Predicting lymph node involvement in patients with primary non-small cell lung cancer (非小細胞肺癌におけるリンパ節転移予測の研究) 主査：教授 白土 博樹

博士 (獣医学)	なか むら さ ゆり 中 村 小百合	Genetic and pathogenetic diversity of fowl glioma-inducing viruses (鶏のグリオーマ誘発ウイルスの遺伝子および病原性の多様性) 主査:教授 木村 享史
博士 (情報科学)	まつ い ゆう すけ 松 井 佑 介	高度集約的シンボリックデータに対する解析手法に関する研究 主査:教授 水田 正弘
博士 (工学)	えの もと あや の 榎 本 彩 乃	Study on surface coil arrays for electron paramagnetic resonance imaging (電子常磁性共鳴イメージングのためのサーフェイスクoilアレイに関する研究) 主査:教授 平田 拓
	いし かわ かつ み 石 川 勝 美	パワー半導体素子の駆動・保護回路技術に関する研究 主査:教授 小笠原 悟司
博士 (水産科学)	いしはら (やすだ) ちあき 石原(安田)千晶	Male-male competition in hermit crabs: Assessment of fighting ability with focusing on the role of major cheliped (ヤドカリのオス間闘争: 大鉗脚の機能に着目した闘争能力の評価戦略) 主査:教授 矢部 衛
	マ チ ュ ニ フ MATTHURA ラ バ イ デ ン LABAIDEN	Elimination of foodborne pathogens from oysters using electrolyzed seawater (食中毒原因微生物を対象とした電解海水によるカキの浄化) 主査:教授 澤辺 智雄
博士 (環境科学)	い とう まさ のり 伊 藤 昌 稚	北太平洋亜寒帯域縁辺海における脱窒の定量化に向けての研究 主査:准教授 渡邊 豊
博士 (生命科学)	プ リ ー ト ン ナ グ Preetom Nag	Local-heterogeneous responses and transient dynamics in colloidal fluids (コロイド流体における局所的な不均一応答と動態) 主査:教授 小松崎 民樹
	み おか てつ お 三 岡 哲 生	A study on the role of phospholipid flippases in asymmetric distribution of phosphatidylserine in <i>Saccharomyces cerevisiae</i> (酵母のフォスファチジルセリン非対称分布におけるリン脂質フリッパーズの役割に関する研究) 主査:教授 田中 一馬
博士 (薬科学)	あら え さち え 荒 江 祥 永	Catalytic Asymmetric Preparation of Planar-Chiral Transition-Metal Complexes by Asymmetric Ring-Closing Metathesis and Their Applications (不斉閉環メタセシス反応を利用した面不斉遷移金属錯体の触媒的不斉合成法の開発と応用) 主査:准教授 小笠原 正道
博士 (学術)	やま だ とも ひさ 山 田 智 久	教師の成長におけるピリーフの変化 主査:教授 河合 靖
博士 (工学)	い せ や けん じ 伊勢谷 健 司	マルチスケール計算におけるフェーズフィールド組織の再現性の定量的評価 主査:教授 三浦 誠司
	シユエ チョウ ルイ 薛 超 瑞	TiO ₂ Nanotube Arrays Prepared by Anodizing in Water-Glycerol Electrolyte and Their Photocatalytic Properties (水・グリセリン系電解液中での陽極酸化によるチタニアナノチューブアレイの合成とその光触媒特性) 主査:教授 米澤 徹
	ジェン 鄭 ハオ 好	Study on a practical frost heave estimation with a combined thermal-hydraulic and mechanical simulation (温度・流体および力学連成シミュレーションによる実用的な凍上評価法に関する研究) 主査:教授 蟹江 俊仁
博士 (理学)	トウ 湯 ロ 璐 ロ 璐	中国都市住宅制度改革により更新された社宅団地の居住者要求と住環境計画に関する研究 主査:教授 森 傑
	ジーヤンカルロ Giancarlo ソリアノ ロレーナ Soriano Lorena	Structure and Electronic Properties of Layered Organic-Inorganic Hybrid Metal-Halide Perovskites Based on Tin, Lead and Copper (スズ, 鉛, 銅を用いた有機-無機ハイブリッド金属ハロゲン化物層状ペロブスカイトの構造と物性) 主査:教授 日夏 幸雄

博士（工学）	ジャン 張 ジェン 裨 歆	Synthesis, Structure and Property of Polyoxometalate-based Novel Microporous Crystalline Oxides. (ポリオキシメタレートアセンブリによる新規結晶性マイクロポーラス酸化物の合成・構造・機能) 主査：教授 向井 紳
--------	------------------	---

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博 士 論 文 名
	氏 名		
博士（水産科学）	みや 宮 園 その あきら 章	北海道，噴火湾における麻痺性貝毒原因プランクトン， <i>Alexandrium tamarense</i> の生態学的研究 主査：特任教授 久万 健志	
博士（環境科学）	ワン ヴィザ Wanvisa ブ ラ ナ BURANA- ボ リ バ ン BORIPAN	Study on synthesis of β -cyclodextrin linked chitosan derivatives with different linkers and removal of dyes (リンカー鎖長の異なる β -シクロデキストリン結合キトサン誘導体の合成と色素の除去に関する研究) 主査：教授 坂入 信夫	
博士（工学）	ひめ 姫 の たけ ひこ 野 岳 彦	免震デバイスを用いた鋼桁橋の耐震性向上に関する研究 主査：特任教授 林川 俊郎	

■レクリエーション

方円会が北大囲碁部との交流会を実施 —全日本学生囲碁選手権大会に向けて「檄を飛ばす会」—

12月13日（土）の午後、本学方円会（教職員囲碁同好会）が、高等教育推進機構に北大囲碁部（学生）を招いて、恒例の「交流会（壮行会）」を実施しました。

日本棋院（プロ棋士養成機関）院生経験者の九段格から初級者（7級程度）まで、学生15名・教職員（OBを含む）13名が参加し、1人当たり2～3局の交流碁を楽しみました。

参加者全員の自己紹介の後、方円会前会長の南部 昇名誉教授（文学研究科）から激励の挨拶があり、交流碁が終始和やかな雰囲気で行われました。特に、道知事杯職場対抗団体戦（本学は一部リーグで健闘中）副将の高山芳幸八段（歯学研究科）からは、顧問の藤田 修教授（団体戦主将・工学部）の名代として、学生囲碁アジア選手権獲得など過去の輝かしい戦績に触れながら期待の檄が飛ばされました。北大囲碁部は、平成3年度全日本学生名人位獲得と平成5・7年度全日本学生団体戦優勝、平成23年度全日本学生本因坊獲得などの輝かしい実績があり、全日本学生囲碁選手権大会における成績はここ数年間4位～5位と健闘し続けています。

近藤真生部長（八段：農学部3年生）からは、「今年は先輩強豪選手の卒業などがあり、国立大学法人のトップを狙うことは難しそうだが、上位を目指して頑張りたい」との決意表明がありました。また、初級者の学生からは「卒業までには何とか頑張って初段になりたい」との発言がありました。

（北大方円会）



交流碁を楽しむ学生・教職員の真剣な表情



檄を飛ばす横断幕と対局表

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成26年12月10日）

議案・URA職の創設について

- ・産学・地域協働推進機構の設置構想について

協議事項・日本語・日本文化研修コース及び日本語研修コース受入学生の身分の明確化並びに日本語・日本文化研修コースの単位化について

- ・学内共同教育研究施設等の廃止について
- ・研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン改正に係る本学の対応について
- ・教育研究組織の長，副長及び附属施設の長の任命及び選考等に係る規程について
- ・教員の人事等に関する特例規則について
- ・教員の懲戒審査手続きについて
- ・諸規則の制定及び一部改正について
- ・就業規則関連規程の制定及び一部改正について

報告事項・平成27年4月1日付け以降に任命する教授候補者の選考について

- ・平成26年度今冬の節電対策について
 - ・平成26年度運営費交付金の追加配分について
-

教育研究評議会（平成26年12月17日）

議題・経営協議会の学外委員について

- ・教員の懲戒について
- ・学内共同教育研究施設等の廃止について
- ・日本語・日本文化研修コース及び日本語研修コース受入学生の身分の明確化並びに日本語・日本文化研修コースの単位化について
- ・研究活動における不正行為への対応等に関するガイドラインに係る本学の対応について
- ・諸規則の一部改正について

報告事項・全学運用教員の措置について

- ・第16回北大・九大合同フロンティア・セミナーについて
 - ・第10回九州大学・北海道大学合同活動報告会について
 - ・URA職の創設について
-

役員会（平成26年12月24日）

議案・日本語・日本文化研修コース及び日本語研修コース受入学生の身分の明確化並びに日本語・日本文化研修コースの単位化について

- ・学内共同教育研究施設等の廃止について
 - ・研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン改正に係る本学の対応について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
 - ・就業規則関連規程の制定及び一部改正について
 - ・平成27年度以降の教育研究施設等の位置付けについて
 - ・全学運用教員（総長管理）について
 - ・国立大学法人北海道大学職員給与規程等の一部改正について
-

※規程の制定，改廃については，「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学人材育成本部規程の一部を改正する規程

(平成26年12月9日海大達第194号)

①科学技術人材育成費補助事業「科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業」の実施に当たり、代表機関として同事業を運営するための事業部門として、連携型博士研究人材育成推進室を設置すること、②兼務教員に関する規程を整備すること及び③運営委員会を設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園及び博物館縦覧規程の一部を改正する規程

(平成26年12月18日海大達第195号)

消費税率が8パーセントに改定されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー称号付与規程

(平成26年12月25日海大達第210号)

本学における教育研究の一層の推進に資するため、本学の教授、特任教授及び招へい教員に対するディスティングイッシュトプロフェッサーの称号付与について、所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学ユニバーシティプロフェッサー称号付与規程

(平成26年12月25日海大達第211号)

本学における教育研究の一層の推進に資するため、世界的に極めて顕著な教育研究業績を挙げた者に対するユニバーシティプロフェッサーの称号付与について、所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則

(平成26年12月25日海大達第196号)

国立大学法人北海道大学人事委員会規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第197号)

ディスティングイッシュトプロフェッサー及びユニバーシティプロフェッサー制度の導入に伴い、人事委員会の任務について所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員就業規則の一部を改正する規則

(平成26年12月25日海大達第198号)

国立大学法人北海道大学嘱託職員就業規則の一部を改正する規則

(平成26年12月25日海大達第202号)

国立大学法人北海道大学職員退職手当規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第209号)

国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第212号)

国立大学法人北海道大学職員就業規則の適用を受ける教員について、年俸制を導入することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員の早期退職に関する規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第203号)

国立大学法人北海道大学職員就業規則の適用を受ける教員について、年俸制を導入すること及び早期退職の要件を見直すことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学年俸制教員給与規程

(平成26年12月25日海大達第207号)

平成27年1月1日付けで年俸制を導入することに伴い、年俸制の適用を受ける教員の給与について所要の定めを行うものです。

国立大学法人北海道大学役員給与規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第205号)

国立大学法人法第35条の規定により準用される独立行政法人通則法第52条第3項の規定を踏まえ、役員給与について、社会一般の情勢に適合したものとし、かつ、国家公務員の給与水準を十分考慮して国民の理解が得られる適正なものとするため、勤勉手当の支給割合の見直しを行うことに伴い、職員給与における勤勉手当相当分が含まれている役員給与の期末手当について、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第206号)

国立大学法人法第35条の規定により準用される独立行政法人通則法第63条第3項の規定を踏まえ、職員の給与について、社会一般の情勢に適合したものとするため、基本給月額、初任給調整手当、通勤のため自動車等を使用する通勤手当の月額及び勤勉手当の支給割合の見直しを行うこと、及び北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション南管理部苫小牧研究林に勤務する職員の労働環境の整備のため、冬期に限り支給している山上等作業手当について、支給期間を通年に拡大することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則

(平成26年12月25日海大達第201号)

①国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、勤勉手当の支給月数を引き上げること、②年俸制導入に伴う国立大学法人北海道大学職員就業規則の一部改正に伴い、特任教員の要件を改めること並びに③国立大学法人北海道大学ディスティンディングイッシュトプロフェッサー称号付与規程の制定による特別教授手当を支給することに伴い所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第208号)

札幌市から認可保育園に対して交付される補助金における人件費の算定については、国家公務員の給与を参考として算定されていることから、当該補助金の額を考慮しつつ、職員の給与について社会一般の情勢に適合したものとし、かつ、国家公務員の給与水準を十分考慮して国民の理解が得られる適正な給与水準とするため、職員が受ける基本給月額を引き上げることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則

(平成26年12月25日海大達第199号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、勤勉手当の支給月数を引き上げることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則

(平成26年12月25日海大達第200号)

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、勤勉手当の支給月数を引き上げることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における研究活動上の不正行為に関する規程の一部を改正する規程

(平成26年12月25日海大達第204号)

平成26年8月26日付けで改正された「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン（平成26年8月26日文部科学大臣決定）」を踏まえ、本学における体制を整備することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

(平成27年1月1日海大達第1号)

本学のオープンファシリティについて、設備の追加を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 研修

**研修名：平成26年度北海道地区国立大学法人事務情報化講習会
(Access研修 初級編・クエリ編・クエリ応用編)**

開催期間：初級編：(第1回)平成26年6月25日・26日，(第2回)平成26年10月15日・16日

クエリ編：平成26年11月18日，20日

クエリ応用編：平成26年12月8日～10日

開催場所：情報基盤センター及び附属図書館リテラシールーム

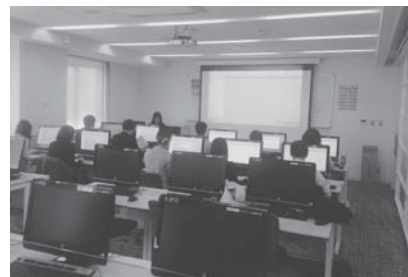
研修目的：業務システムのデータをAccessを利用して活用するための知識，基本的な情報セキュリティ等の知識を習得することを目的とする。



初級編



クエリ編



クエリ応用編

(情報環境推進本部情報推進課)

研修名：平成26年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

開催期間：平成26年12月2日・3日

開催場所：百年記念会館大会議室

研修目的：学生指導，学生支援及び学生サービス業務を円滑かつ適正に行うために必要な基本的知識，対応能力等を習得することにより，学生支援担当職員としての能力の向上を図ることを目的とする。



研修の様子



西田久美学務部長から修了証書の授与

(学務部学生支援課)

■ 表敬訪問

国内

年月日	来訪者
26.12.18	日本航空株式会社 北海道地区支配人 藤田 克己 氏
26.12.25	JR北海道ホテルズ株式会社 代表取締役社長 石見 誠嗣 氏



日本航空株式会社 北海道地区支配人
藤田 克己 氏 (右側)



JR北海道ホテルズ株式会社 代表取締役社長
石見 誠嗣 氏 (左側)

(総務企画部広報課)

海外

年月日	来訪者	来訪目的
26.12.12	駐日アイルランド大使館 Anne Barrington 大使	本学との連携について意見交換
26.12.17	駐日ベラルーシ共和国大使館 Sergei K. Rakhmanov 特命全権大使	両国の交流に関する懇談
26.12.18	イルクーツク国立大学 Aleksandr Arguchintcev 学長 極東連邦大学 Vladimir Kurilov 副学長 北東連邦大学 Mikhail Prisiazhnyi 副学長 太平洋国立大学 Vera Luchkova 建築学部長	大学の世界展開力強化事業国際運営委員会及びシンポジウム出席



駐日アイルランド大使館 Anne Barrington 大使
(右から3人目)



駐日ベラルーシ共和国大使館
Sergei K. Rakhmanov 特命全権大使 (左から3人目)



イルクーツク国立大学 Aleksandr Arguchintcev 学長 (左から3人目)
極東連邦大学 Vladimir Kurilov 副学長 (左から4人目)
北東連邦大学 Mikhail Prisiazhnyi 副学長 (右から5人目)
太平洋国立大学 Vera Luchkova 建築学部長 (右から4人目)

(研究推進部産学連携課, 国際本部国際連携課)

■人事

平成26年12月5日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	久 野 聡 子	北海道大学病院助教

平成26年12月12日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】 (辞職)	幡 野 智 子	北海道大学病院看護部看護師

平成26年12月15日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【部局長】 大学院法学研究科長 法学部長 (期間：平成28年12月14日まで)	長谷川 晃	大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授
【副研究科長】 大学院法学研究科副研究科長 (期間：平成28年12月14日まで)	加 藤 智 章	大学院法学研究科教授
【教育研究評議会評議員】 (期間：平成28年12月14日まで)	加 藤 智 章	大学院法学研究科教授
【助教】 (辞職)	倪 潤	大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター助教

平成26年12月16日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 大学院医学研究科助教 大学院医学研究科助教	立 松 恵 横 田 正 司	採用 採用

平成26年12月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 (辞職)	地 主 将 久	遺伝子病制御研究所附属感染癌研究センター准教授
【講師】 (辞職)	辻 野 一 三	北海道大学病院講師
【助教】 (任期満了) (辞職)	高 橋 紀久子 佐 野 孝 光	北海道大学病院助教 遺伝子病制御研究所助教
【技術職員等】 (辞職)	平 尾 真 也 遠 藤 麻 依 大 石 美 佳	水産学部附属練習船うしお丸甲板員 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
	北 本 千 尋 窪 田 恭 子 佐 藤 美 里 中 川 彩 香 美 浪 良 恵	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師
【嘱託職員】 (辞職)	石 川 信 行	医学系事務部会計課

平成27年1月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【副学長】 (期間：平成27年3月31日まで)	山 下 正 兼	大学院理学研究院教授
【経営協議会委員】 (期間：平成28年12月31日まで)	Christina Ahmadjian	一橋大学大学院商学研究科教授
【教授】 大学院保健科学研究院教授	結 城 美智子	採用
【准教授】 大学院工学研究院准教授 (転出) 長崎大学大学院工学研究科准教授 室蘭工業大学大学院工学研究科准教授	橋 本 望 作 田 絵 里 高 瀬 舞	採用 大学院理学研究院助教 触媒化学研究センター助教
【講師】 北海道大学病院講師	品 川 尚 文	大学院医学研究科助教
【助教】 大学院医学研究科助教 大学院医学研究科助教 大学院医学研究科助教 大学院医学研究科助教 大学院獣医学研究科助教 大学院情報科学研究科助教 北海道大学病院助教 北海道大学病院助教 遺伝子病制御研究所助教 (転出) 帯広畜産大学助教	岩 見 大 基 折 茂 達 也 金 野 陽 輔 坊 垣 暁 之 佐々木 東 富 岡 克 広 中 沢 大 悟 福 田 寛 恵 三 岡 哲 生 川 合 佑 典	採用 採用 採用 北海道大学病院助教 採用 採用 採用 採用 採用 大学院医学研究科助教
【係員】 医学系事務部総務課 北海道大学病院総務課	辻 芳 朗 長 井 一 真	財務部調達課 採用

新任副学長・部局長等紹介

平成27年1月1日付

平成26年12月15日付

副学長に



やました まさかね
山下 正兼 教授

副学長として山下正兼教授が発令されました。
任期は、平成27年3月31日までです。

法学研究科長・法学部長に



は せ が わ こう
長谷川 晃 教授

平成26年12月14日限りで亙理 格法学研究科長・法学部長が任期満了となり、その後任として長谷川晃教授が発令されました。
任期は、平成28年12月14日までです。

略 歴

生年月日 昭和31年11月15日
昭和54年3月 北海道大学理学部卒業
昭和56年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和59年9月 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和59年9月 理学博士（北海道大学）
昭和60年4月 } 日本学術振興会奨励研究員
昭和61年3月 }
昭和60年4月 } 北海道大学教養部非常勤講師
昭和63年3月 }
昭和63年4月 } 日本学術振興会特別研究員
平成元年7月 }
平成元年8月 岡崎国立共同研究機構助手
平成5年4月 北海道大学理学部助教授
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
平成10年4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成15年4月 } 北海道大学理学部生物科学科長
平成16年3月 }
平成18年4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院教授
平成20年4月 } 企画・経営室室員
平成23年3月 }
平成22年4月 北海道大学大学院理学研究院教授
平成22年4月 } 北海道大学大学院理学研究院副研究院長
平成23年3月 }
平成23年4月 } 北海道大学大学院理学研究院研究院長
平成25年3月 }
平成26年4月 } 北海道大学総長補佐
平成26年12月 }
平成26年4月 } 北海道大学高等教育推進機構副機構長
平成27年3月 }

略 歴

昭和52年3月 東北大学法学部卒業
昭和54年3月 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了
昭和57年10月 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了
昭和57年10月 法学博士（東京大学）
昭和58年7月 北海道大学法学部助教授
平成3年2月 北海道大学法学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院法学研究科教授
平成16年4月 } 北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育センター長
平成20年3月 }
平成23年4月 } 北海道大学役員補佐
平成26年3月 }
平成26年4月 } 北海道大学総長補佐
平成26年12月 }

新任教授紹介

平成27年1月1日付



保健科学研究院教授に

ゆうき みちこ
結城 美智子 氏

保健科学部門基盤看護学分野

最終学歴

東北大学大学院医学系研究科博士後期課程修了
博士（障害科学）（東北大学）

専門分野

老年看護学

訃報

名誉教授 まつの 松野 しげお 誠夫 氏
(享年92歳)



名誉教授 松野誠夫氏は、平成26年12月3日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、大正12年1月5日札幌に生まれ、昭和21年9月に北海道帝国大学医学部を卒業、同22年9月に北海道大学医学部第二外科副手、同12月に同学部第三外科（整形外科）副手を経て、同23年8月に同学部整形外科助手となられ、同26年2月に医学博士を授与されました。昭和27年8月に北海道大学

医学部整形外科講師に就任された直後の10月から同30年3月まで米国イリノイ州立大学整形外科に留学、帰国後の同年7月に北海道大学医学部整形外科助教授に就任されました。昭和46年9月に北海道大学医学部整形外科教授に昇任され、同57年1月から2期にわたり同学部附属病院院長を務められ、同61年3月に定年退官、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されました。退官後は、昭和61年6月から美唄労災病院院長、平成7年4月からは医療法人北海道整形外科記念病院理事長を務められました。

先生は、誰もが認める日本の整形外科を牽引してきた偉大なリーダーの一人であり、本領域の臨床並びに基礎研究において素晴らしい業績を残されてきました。公益社団法人日本整形外科学会では多くの要職に就かれ、日本整形外科学会会長をはじめ数多くの関連学会会長を歴任されました。同時に、教

室を中心とした北海道内における整形外科診療体制を構築され、道内の地域医療の充実・発展にも多大な貢献をされました。これらの業績は高く評価され、第1回（昭和25年）及び第29回（昭和53年）北海道医師会賞、日本整形外科学会学会賞（平成19年）を受賞されています。また、平成10年には勲二等瑞宝章を受章され、平成24年には北海道特別功労感謝状を贈呈されています。

以上のように、先生は本学で整形外科一筋に仕事をされ、多くの優れた人材を輩出してきました。これらの業績に対し、平成25年度北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科特別賞を受賞された際には、大変喜んでおられました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(医学研究科・医学部)

編集メモ

●本年も早1ヶ月が過ぎました。受験シーズンとなり、1月17日(土)・18日(日)には、大学入試センター試験が実施されました。雪の降る中、多くの本学在學生や高等学校関係者が受験生を激励する姿が見られました。

●インフォメーションセンター「エルの森」では、来月から企画展示を行います。

2ヶ月ごとに展示を入れ替え、本学で実施している様々な研究の一端をご紹介しますので、ぜひお立ち寄りください。



2012.12.2 札沼線 豊ヶ岡 (月形町)

北の鉄道風景 22 夕暮れの秘境駅

山奥や原野などの人跡稀な場所にある鉄道駅は、鉄道ファンの中で「秘境駅」と呼ばれる。写真の札沼線（学園都市線）豊ヶ岡駅も、秘境駅の一つとして知られている。札沼線は、起点の桑園駅から終点の新十津川駅まで、石狩平野に敷設された平坦な鉄道路線である。しかし、豊ヶ岡駅の前後の区間のみ例外的に、人里から離れた山間部に線路が敷かれてい

る。このような場所にあるわけだから、この駅を利用する乗客はほとんどいないようだ。雪が降りしきる日曜日の夕暮れに、誰もいない秘境駅をローカル列車が走り去ってゆく。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ① No.730 平成27年1月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html